

調査報告

減災サイクルのステークホルダーと
事前復興への取り組みの実相(III)

—被災地石巻での聞き取り調査から：そして、コロナ禍下の「新しい日常」へ—

所澤新一郎・大矢根淳

目 次

はじめに	1
1. 語り部 志野ほのかさん	5
2. 谷川浜・ホヤ漁師 渥美貴幸さん	14
3. 空の駅プロジェクト 武田文子さん	23
4. 3.11 メモリアルネットワーク 中川政治さん	33
むすびにかえて	41
編集後記	45

調査報告

減災サイクルのステークホルダーと
事前復興への取り組みの実相 (Ⅲ)

—被災地石巻での聞き取り調査から：そして、コロナ禍下の「新しい日常」へ—

所澤新一郎・大矢根淳

はじめに。

2019年12月に中国湖北省武漢市でその発生が報告された新型コロナウイルス感染症は、にわかには世界的に流行し、日本でも緊急事態宣言（第1回目：2020年4月）が発令されて、その後、事態の推移を見渡しながらか「新しい生活様式（の実践例を踏まえた「新しい日常」）」が提唱されてきた。本稿共同執筆者二名が属する専大社研特別研究助成グループ¹では2021年度、こうしたコロナ禍²下、東日本大震災被災地（石巻市）での生活再建・復興がどう進捗しているの

¹ 本研究推進主体は、専修大学社会科学研究所2021年度特別研究助成（大矢根グループ）「減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相」である。もともと、2017年度にグループ研究助成B（単年度：本研究の前身として=飯考行代表：「復興ステークホルダーの探索的再構築に関する研究実践」）が、そして、2018、2019年度にこれを発展させたグループ研究助成A（3年継続）が採択されて研究に就いていたが、2020年度はその活動を一年間休止とした（構成メンバーの多くが長期（中期）在外・国内研究員となり、学内業務に就けないこととなったため）。2021年度に最終年度として再開するにあたり、この一年間だけ、特別研究助成枠で活動することが認められることとなった。特別研究助成枠で研究活動するために、社研規定に即して登録すべき所員人数を集い整え、結果、以下のような多人数で研究グループを構成することとなった。これは、特別研究助成枠で研究活動を展開した場合、その成果を『社研叢書』として刊行する義務が生じるため、その執筆陣として多くの研究者を招き入れたことによる。同『叢書』は2022年度刊行予定であり、二部構成となる同書の第二部に本稿を含むインタビュー記録が、解題を付して掲載されることとなる。

所員：大矢根淳、飯考行、佐藤慶一、勝俣達也、堀江洋文、小林貴徳、田中正敬、樋口博美。参与：福島義和、近江吉明。客員研究員：所澤新一郎、浅野幸子、Carmen Grau、宮定章、李東勲、Mens Virgine Marie Lea。アンダーラインは、当初グループ研究A発足時のメンバーで、それ以外は2021年度特別研究助成採択時に増員したメンバーである。

² 当初はひろく一般的に「新型コロナウイルス感染症」と呼称されていて、政府・厚生労働省の公式表記でもそのように記載されている。

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html

社会的影響が長期化するに伴い、メディアでは「コロナ禍」という表記が増加していった（放送用語委員会：https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/pdf/20210601_2.pdf）。

しかしながら本稿では、こうしたメディア事情に即して「コロナ禍」を使うのではなく、災害社会学の古典に依拠して同用語を使用している。これについては、前稿を参照していただきたい（所澤・大矢根，2021，

か、過年度に引き続き調査（インタビュー）を重ねてきた。本稿は、その一連のインタビュー記録の第4部（所澤・佐藤・大矢根, 2018、所澤・大矢根, 2019、所澤・大矢根, 2020 までの3部に続く）にあたる。

本研究では主に東日本大震災の「復興」事象に焦点を当ててきた。震災復興の現場に深く切り込み精査して³、そこに就く主格を改めて捉え・問い直し、ローカルで地道に続けられている取り組みを発掘・表象してきた（現実にはどのように「復興」が進捗しているのか）。そこでは、復興行政においてオーソライズされつつ「災害ケースマネジメント」（津久井, 2020）諸活動として取り上げられている事例がいくつも再確認されたが、そこで例示されている活動以外にも、私たちの調査では、被災現地に潜在する諸ニーズを掘り起こしつつ地道に活動を継続・蓄積しているグループ・個人が、数々「発見」されてきた。それらを適切に表象することで、復旧・復興から防災の位相を経て日常的諸関係の再構成過程を検討する減災サイクル論が豊かに理解されるのではないかと⁴と、本研究では考えてきた。

そこで今年度、本稿では以下の①②③④、4つのインタビュー記録（これらを含めて過年度実施してきた一連のインタビューを表1にまとめた）を掲載することとする。

現地調査名称：「減災サイクルのステークホルダーの実相」調査～巨大災害（東日本大震災／首都直下・南海トラフ地震）を射程に～

調査実施日時：第一次調査 2021年10月30日－31日 インタビュー①②
第二次調査 2022年1月15日－16日 インタビュー③
第三次調査 2022年1月22日－23日 インタビュー④

調査対象者：①語り部活動従事者 志野ほのかさん
②谷川浜・ホヤ漁師 渥美貴幸さん
③空の駅プロジェクト 武田文子さん
④3.11メモリアルネットワーク 中川政治さん

調査メンバー：2021年度社研特別研究助成（大矢根グループ）・現地調査参加メンバー
大矢根淳、飯考行、福島義和、近江吉明、所澤新一郎、カルメン・グラウ、

p.1)。

³ そこにおいて、本研究グループメンバー・所澤が本領を発揮する。「共同通信に勤務する所澤は、これまで各支社在職期間の20余年にわたって常に我が国の大災害の現場を取材する機会に遭遇し関わり続けてきた記者としての経歴を持つ。雲仙・普賢岳噴火災害(1991年、長崎県)、北海道南西沖地震・奥尻津波災害(1994年、北海道)、東日本大震災(2011年、宮城県)など。このたびの一連の社研現地調査はこうした所澤氏独自の取材ルートに全面的に拠っている」ことをここに記しておく（所澤・大矢根, 2019, p.3）。

⁴ 「復興」概念の再検討およびそれを前提にした「減災サイクル論」の構想については別稿に譲ることとする（小林 2020a, 2020b）。本研究グループでは2021年秋に定例研究会を開催して小林秀行氏（明治大学）を招聘し、日本災害復興学会設立10周年事業として実施された同概念再検討の経緯と知見について講演していただいた。小林秀行氏『「復興」概念検討の経緯とこれからの研究実践の展開に向けて』（専大社研2021年度第五回定例研究会：2月18日（金）@生田社会調査実習室I/ZOOM）。また、こうしたリベラルな復興論（公共土木事業「竣工」を「復興」と呼称して「国土強靱化」を構想する復興行財政当局とは異なる視角）では Adaptive Governance（順応的ガバナンス）が唱道されていて、そこでは「レジリエンス」「サステナビリティ」「インクルージョン」「エンパワーメント」「ウェルビーイング」の5指標が提示されて、それらの連関が諸事例・データに基づき分析され始めている（黒田, 2021、大矢根, 2021）。

李東勲、Mens Virgine Marie Lea、

調査方法：所澤が対象者にアポイントメントをとり、同日参加の調査メンバー全員で指定された施設に赴き、インタビュー形式で2-3時間前後お話しをうかがった。質問項目等はあらかじめお知らせしておき、インタビューの流れに沿って適宜、詳細質問項目を加えていった（半構造化インタビュー）。会話をICレコーダーで録音して、後日、トランスクリプトを作成した。テープおこし原稿については所澤が文体調整したうえで対象者に送り、チェックしてもらって掲載許可をいただいた。

本稿に掲載する2021年度のインタビューは、これに先立つ過年度=2017-19年度のインタビューから丸一年以上を挟んでの実施となっており、その間に2020年度早春から現在まで続くコロナ禍が発生している。この度のインタビューは、過年度同様、東日本大震災の復興10年にどう活動を展開してきたかがたがわずねられたが、当然、回答ではその端々にこの一両年のコロナ

表1 石巻復興ステークホルダー・インタビュー調査

インタビュー実施年月日	『月報』掲載号等	対象者名	所属
20180112	No.660=2018-6	岩元暁子	石巻復興きずな新聞
20180121	No.660=2018-6	杉浦達也 新井英児	サードステージ
20180122	No.660=2018-6	亀山貴一	はまのね
20190202	No.672=2019-6	柴田滋紀	にじいろクレヨン
20190202	No.672=2019-6	村島弘子	移動支援 Rera
20190202	No.672=2019-6	増田敬	石巻じちれん
20190202	No.672=2019-6	長純一	石巻市立病院開成仮診療所
20190916	No.684=2020-6	佐藤尚美	ウィーアーワン
20190916	No.684=2020-6	吉澤武彦	日本カーシェアリング協会
20200223	No.684=2020-6	荒木裕美	ベビースマイル石巻
20200223	No.684=2020-6	松村豪太	ISHINOMAKI 2・0
20211030	No.708=2022-6	志野ほのか	語り部
20211030	No.708=2022-6	渥美貴幸	谷川浜・ホヤ漁師
20220115	No.708=2022-6	武田文子	空の駅プロジェクト
20200122	No.708=2022-6	中川政治	3.11 メモリアルネットワーク

禍への対峙の履歴が盛り込まれてきており、コロナ禍対応を含む最近の活動事情(成果や課題)から遡って復興10年が振り替えられる文脈となっている。したがって、この数年の一連のインタビューで問うてきた項目を揃えるために、過年度のインタビュー対象者にも、この一両年の取り組みについて改めて語っていただく機会が必須となっていた。そこで2021年度調査では、過年度のインタビュー対象者を再訪して補足インタビューを実施している。表1には本特別研究助成グループで足掛け4年間(2017年度グループ研究助成Bから2018年度のAを経て、2021年度特別研究助成まで)に実施したインタビュー事例を(補足インタビューを含めて)一覧としてまとめた(なお、2022年夏以降、補足インタビューを計画している)。

今、巷ではコロナ禍対応、with コロナ・新しい日常のあり方が模索・喧伝されている。一方、石巻など東日本大震災の復興の現場では、10年総括検証作業が各方面で進められたことで、また、その検討の素材となる政府復興予算執行(第一期復興・創生期間=2011年から10年間)が一つの区切りを見たような錯覚が、オリンピックの開催(復興の成果を世界に披露するかのようなスローガン「復興五輪」とともに広がっていたことで、巷の視角は復興からコロナ禍対応に異動している。しかしながら、被災現地では「オリンピックによって復興が後押しされたか?」を問うアンケート調査⁵で、「思わない」と回答した人が63%を占め、「思う」と回答した人の6倍近くに達している。巷の忘災事情(被災地・非被災地の「温度差」事情)と被災現地の取り残され感、そこにコロナ禍が被ってきた。

また、2020年度は全国的に、梅雨から台風時期に水害対応を想定して、三密を避けたコロナ禍下の避難所運営などが話題となっていた。コロナ禍と災害対応はそのような文脈で取り上げられ始めた。石巻市でも5月の大雨警報発令の事案以降、これは重要な課題の一つとして認識されている⁶。しかしながら、石巻圏では、決して終わらない日常、生活再建の取り組みが、地道に継続している。本年度はそれらをいくつか取り上げる。

発災から10年経つと風化が本格的に懸念され出すところで、記憶や遺構が論じられる。しかしながらそこでの立論経緯に対しては、被災経験者から根源的な疑義が投げかけられつつある。例えば津波避難に関する「てんでんこ」について。実際には「てんでんこ」に逃げられなかったからこそ多くの犠牲者が出ている現実、その生き残ってしまった被災者の痛み(自責の念まで)を等閑に付して、記憶、教訓、伝承として「てんでんこ」が喧伝されて伝承施設等で展示されていること、それは犠牲者や遺族の存在を包摂したパブリックな「災害の記憶」として構成はされていない(観光施設になっている)こと、そうした重たい批判。個人として(志野ほのかさん)、

⁵ NHKが2021年8月25-28にかけて、岩手・宮城・福島沿岸と原発事故による避難指示が出された地域に住み、インターネットの調査会社に登録している人々を対象にWEB上でアンケートを行い、1000人から回答を得た。<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210908/k10013248641000.html>

⁶ 「大雨警報、避難所どうする 石巻市ひやり」『朝日新聞』2020.5.20

民間サイドから（中川政治さん）、教訓と伝承を自ら考え表象していこうとする取り組みについて語ってもらった。

また、復興は既定復興の公告（復興公共事業の竣工）によって結審するものではなく、地道に続けられる営生機会の再構成のプロセスそのものであることを体現してみせている浜のホヤ漁師（渥美貴幸さん）の語りは、奥深く引き込まれる。また、不安・不安定な避難生活において自製してきた集いの機会を、避難所・仮設住宅解消後も継続する意義を体現して見せている取り組みからは（武田文子さん）、復興本義の奥深さを認識させられる。

（以上、大矢根淳）

1. 語り部 志野ほのかさん

東日本大震災の津波で被災した宮城県東松島市野蒜地区で、6年生として卒業を間近に控えていた志野ほのかさんは、野蒜小学校の体育館で被災した。近所の人から避難を促されても、ほのかさんの下校を待っていたという祖父の五男（いつお）さんの死を無駄にしたくない思いで、高校生の中から当時のことを多くの人に伝えてきた。2021年10月30日のインタビューは、志野さんが同年春に社会人になって以降では初めての現場案内だそう。①旧野蒜小学校、②旧野蒜駅の震災復興伝承館、③自宅跡周辺、④高台に新たに造成された野蒜の新市街地のカフェ…。お持ちいただいた多くの写真を見せてもらいながら、あの日の体験やおじいさんのことをうかがった場所は4カ所（以下の①②③④）に。野蒜への思いがあふれた語りとなった。

①【宮城県東松島市の旧野蒜小学校】にて

社会人になってからは今回が初めての語り部です。今いる場所が、私が通っていた野蒜小学校です。当時6年生でした。野蒜は海がきれい自然がいっぱいでした。夏になると海外からも訪れるほど、にぎやかでした。海が目前で、海と共に生活してきた感じです。

（卒業写真などを見せながら）海をバックにみんなで撮りました。私は男勝り、ショートカットで。6年1組でした。校舎は海から1.3km。現在1階と2階で色が分かれていますのは、津波の高さを表しています。1階はまるまる潰れました。

震災の日は、3月にもかかわらず大雪でした。ふだんの下校は2時くらいだったんですけど、その日は卒業式の1週間前で、総合学習で地域の人に感謝を伝えて授業が押してしまいました。いつも幼なじみと2人で登下校していて、門を出たところで地震が発生しました。雪でふざけていたので気づかなくて、校内放送で教頭先生が焦った声で「ただいま地震が発生しています」と言うのを聞いて初めて気づきました。地面が揺れる感じ、周りの家がすごく揺れる音、窓ガラスが割れる音、今も残っています。揺れたボールが折れてしまうのではと感じました。1階の真ん中あたりにあった職員室から先生が走ってきて校庭で児童を集めて抱え込んでいる姿が見えたので、私達も走りました。怖いというより、非日常にワクワクしていて「家に帰って何の片付けをしようかなあ」と考えていました。

雪が降っていたこともあって、先生の指示で校庭の子どもたちは体育館に避難しました。靴を脱がされ

て、あとで足が水に漬かってすごく寒い思いをしたので、何で靴を脱いだんだろうと後悔しました。小学校は指定避難場所で、体育館には地域の人もどんどん避難してきました。近くに老人ホーム、保育所があったので、車いすの方や子どもたちも。男子児童は先生の手伝いでマットを出し、パイプいすを並べました。最終的には 300 人ちょっとの人が避難してきました。それまで避難訓練は校庭や体育館でしたし、校舎にいた児童も、校舎に入れてくれと言う住民もみな体育館でした。

友達とフロアの真ん中あたりに腰を下ろしたんですけど、ざわざわしていた体育館がさらにざわついて、座っていた人たちが一斉に立ち上がったんですよ。何が起きているか分からず、皆さんに合わせて立ち上がってウロウロと。2階のギャラリーに上がる階段に行く人と、向こう側のステージに行く人に分かれ始めて。記憶がないんですけど、私は階段に向かって幼なじみの手を引いて走ったみたいです。人の流れに沿ってギャラリーに上がり、何でみんな逃げているんだろうと下を見ていました。入口が真下にあり、最初はパケツで水を流したくらの泥水が見えて、何で体育館に入ってくるんだろうとぼおっと見ていたらその瞬間、跳び箱などがある倉庫の扉を突き破って、滝のように水が一気に流れ込んできました。人と一緒に、両脇の扉からも、全方向からも水が入ってきました。

—音はしましたか。

滝のような…悲鳴も混ざって。

—ギャラリーに逃げ込んだ人はどれぐらいいましたか。

いっぱいでした。私はタイミングよく上がれたんですけどぎゅうぎゅうで。我に返って見たとき、老人ホームの車いすのおばあちゃんが、階段を上がれなくて取り残されて、どんどん水かさが増して見えなくなって。泣き叫んでいる姿、見えなくなる姿を見て「自分も死ぬかも知れない」と覚悟しました。水かさが増して、体育館が洗濯機状態の渦となってグランドピアノや人を巻き込んでいく様子を見ても、津波とは分かりませんでした。

自分の足元にも水が近づいてきたので「ここにいたら死ぬかもしれない」と思い、体育館が水でいっぱいになったら窓から逃げようと、幼なじみの手を引いて窓の所に行きました。外を見ると、自分と同じ高さに車が全部浮いて、車に人が乗って助けを求めていて、夢なんじゃないかと思う現実でした。体育館ではステージ側に逃げた人がおぼれました。私がステージ側に走っていたり、フロアにいたりしたら今は生きてないと思います。1週間後に卒業式を控えていたので、紅白幕を引きちぎって助ける男の人の姿がありました。友達も、全身漬かって上から引っ張ってもらって助かったという子が多くて。上からカーテン投げてもらった子、バスケットボールのゴールにつかまった子もいました。

水が足首まで来て「生まれ生まれ」って祈るしかなくて、それ以上、上に来ることはなかったんですけど「津波は第二波の方が強いんだよ」と言う住民の話が聞こえて「これ以上来たら死ぬ」と考えました。海に近いこともあって、毎年どの学年も着衣泳という授業をしていました。おぼれたらランドセルを持ってば浮くと習っていたので、幼なじみと一緒にランドセルを抱え、水が来たら「これ持って浮こう」「絶対生きよう」と話しました。

水が止まってからは暗くなって、そこからは寒さとのたたかいです。靴下が水でぬれて、本当に寒くて。せつかく助かって、全身水に漬かっていて低体温症で亡くなった人もいたそうです。ほかの友達と4人ぐらい、ごえながら集まって、寝ないように「しりとりに」をしながら励まし合いました。

夜 10 時くらいまで体育館にいて、水が引いて地域の人が体育館に入ってくるようになって「校舎の方が安全」と移動が始まりました。停電で真っ暗、月と星がきれいその明かりで、見たくない現実もあって、ギャラリーの下には亡くなっている方がいらしたり、手だけ見えていたり、小学生には受け止めきれない現実でした。亡くなった方をまごながら「ごめんなさい」と言ったのが記憶に残っています。靴をはいてなかったのが、友達のお父さんがおんぶしてくださって校舎に向かいました。

—体育館で亡くなった方は。

13 人…。学校で亡くなった児童はいません。下校した子が何人か亡くなりました。

—体育館で、子どもたちが「野蒜小ファイト」と言ったそうですね。

暗闇で誰かがファイトと言い始めて校長先生が「そうだね、頑張ろうね」と返してくださって、何回もファイトのやりとりがあつて。反対側のギャラリーの同級生とも安否確認で名前呼んで返しました。私も小学生なりに場を明るくしたい思いがあつたので、好きだったアーティストの明るい曲、卒業式の合唱曲「旅立ちの日に」や校歌をロずさんで。あとで地域の人から励みになったという声は聞きました。

—これで助かったと思えた瞬間はありましたか。

窓から水が引いていくのが見えて、目印にしていた車のタイヤが見えてやっと、同じのが来ることはないかな、「生きられた」という安心感があったんですけど、「（自宅がある）新町、壊滅状態だってよ」という会話がギャラリーで聞こえて、家族の心配をする余裕が出てきました。家の方が海に近いので「そうだよな」と思い、両親と姉は石巻の内陸部の職場や学校にいたので「大丈夫」と思いました。自宅にいるおじいさんは「逃げているだろう」と謎の自信があつたんですけど、初めて「大丈夫かな」と思いました。

—いつごろ、食べることができたのですか。

先生たちが回って食パンやおにぎりが配られて。友達と食パンを4分の1くらいに分けたんですけど、のどを通らなくて残しました。校舎に移動したのは最後の方で、お年寄りや子どもたちを優先して「最後でいいです」と言っていたので、教室がいっぱいでした。ドアを開けると、ヘドロのにおい、人が多かつたのにおいがすごくて。人が少ないところを探してやっと見つけたのが3階の6年2組でした。カーテンを引きちぎって布団にして、ランドセルを枕にしてとりあえず休もうとみんなで寝っ転がったんですけど、余震もすごくて一睡もできないまま、段々外が明るくなって、窓から町を見たときの衝撃が忘れられなくて、知っている町だと思えないくらい、戦争が起きた後のような状態でした。

朝早く、幼なじみのおばあさんが偶然小学校に避難していて、近くの小さい避難所に「行ってみる？」と声を掛けられて、学校を離れることに不安はあつたんですけど、親がいるかもしれないので出ました。幼なじみとおばあさんと向かっていたら、偶然に両親が学校に向かっていて、真ん中あたりで再会しました。父が抱きしめてくれて、その時の私の第一声、記憶にないですけど「死んだ人たくさん見たよ」と言つたみたいで、現実がわけわからないことになっていたんだろうと思います。「生きてて、よかつた」となって、そこで母から「おじいさん、いないって」と告げられ、逃げていないことを知りました。

—ご家族は、よく石巻からすぐに来ることができましたね。

偶然が重なって父が母の職場を通つたときに見かけて、姉も拾って車に3人で。途中、川に家が浮いているのを見て「何で家が？」と津波が来ているのを知らなかつたみたいです。自宅に向かつたら、水で先に行けなくて、私とおじいさんがいない、どこにいるんだとなって小学校に向かおうとしたけど、周りの人に「第二波が来るから」と止められ、暗くなつたので親戚の家に避難して、日が出て小学校に向かつてきたそうです。父からも母からも「生きてて、よかつた」と強く抱きしめられて少しだけ安心できました。姉は親戚の家に来て、私が行つたらずつと泣いて、離してくれなくて、しがみついていた。

—ご自身が体験したことをご家族に話しましたか。

何も話した記憶はなくて、親も聞いてこなくて「ご飯食べたの」とも聞かなかつたです。食料や温かいものを無言でただ渡してくれて、のどを通らない様子を見て、たぶん察して、あえて何も聞かずに…でしたね。

「おじいさん、いないって」と聞いて「あ、そうなんだ」と思い、次に母から「ほののこと、待ってたんだって」と言われました。「何で？」というショックが最初にあつて、時間がたつにつれて、亡くなつたとは思つていないんですけど「ほのが帰っていれば、よかつたんだ」と後悔に変わり、「ほののこと、待っていたんだ」という感情になりました。

—お母さんは近所の方から聞いたのでしょうか？

家の周りに4軒あつたんですけど、2軒がおじいさんのきょうだいだったのでいつも仲良くて、その奥さんが最後おじいさんに声を掛けたそうです。その方が避難所で「いつおさん、声掛けたけど、ほのちゃん待つ

ていると言うので置いてきた」とおっしゃって。

—おじいさんのこと、何て呼んでいましたか？

おじいさん。おじいさんは「ほの」と呼んでいました。

—1週間後に予定していた卒業式は。

もちろん（予定通りには）できなくて。3月28日に鳴瀬一中の校舎を借りてやったんですけど、県外の親戚の家に行った子もいたので全員揃わなくて。着の身着のまま、避難物資の中から一番かわいい、卒業式っぽい服を避難所の人を選んでもらって。初めの避難所には1週間ぐらい、100人以上いて、ぎゅうぎゅうの状態を過ごした後、新町地区全員で松島の大きい施設に移動しました。

—学校へ行ったのは、次はいつでしたか。

行きたくないというか、感情的にあまり近寄れないというか、あれ以降行ってなくて、教室に残っている物を取りに来られる人は来てくださいと言うときにきました。

—野蒜小の校舎が遺構ではなく、宿泊施設「キボッチャ」という形で再利用されています。

キボッチャができた当初は、どうなんだろうというのが正直な感想で、人も亡くなったし、よくない記憶のところが施設となってバーベキューもするので、自分は泊まれない、こうやって残されるんだという感情がありました。時間がたって、いろんな人が利用するようになって、野蒜へ来てくれるのが嬉しい感情に変わって、全部は話さなくてもこういうことがあったと話せる場所ですし、残ってよかったなと思えるようになりました。

—あの日のことを語り継ぐ遺構としての残され方ではないけれど。

最初は想像できなかったんですけど意外といいなあ。集まる場所は大事ですね。時間がたつにつれてどんどん建物や木もなくなっている。震災前を思い出せる場所があるのはありがたいですね。話して伝えるのは限界もあって、来てもらって感じてもらえるものもあります。来た人に「こんなに家少なかったんですか」、「草っ原だったんですね」と言われるのが悲しくて、木や緑がたくさんあって、たくさん生活していた人がいたんです、なくなっちゃったんですということ、多くの生活と命があったことは伝えたいですね。

—もし、ほのかさんが当時の校長だったらどうしますか。

毎年マラソン大会で全員山の方には行ったことがあって、総合学習で山に入ったことがあったので今なら一発で向かいます。校舎でも心配なので。地震と火事だけで、津波の避難訓練をしたことがなくて、津波が来ると誰も思っていない、ここは海から結構離れていて安全だという誤った認識がありました。

—ほかに、私だったらこうするということは？

当時は先生頼り。自分で身を守るとか考えてなくて、先生に言われるまま体育館に座っていたので、防災教育があれば危ないから自分たちで動こうという感情が出たと思うんですけど。海が近いにもかかわらずそういう行動しなかったのが悔しいですね。何もできなかった。自分たちで生き残れる力、判断できる力をつけさせたいですね。知識がなかったのがいちばんですけど、松島で守られる、運河があるからここには来ないとも聞いていて。

②【旧野蒜駅にできた東松島市震災復興伝承館】にて

（かつての野蒜の写真を見る一同に）海水浴で全国から来る方は、この駅を降りて、橋を渡って真っすぐ行けば海です。今は何もありませんけど、松林が本当にきれいで、松林を通して海に行くのが醍醐味でした。家がたくさんありました。震災直後は亡くなった方が松の木に引っかかって見つかったことも多かったみたいです。震災の後、避難所から、幼なじみの家族と私の家族でこの周辺を歩いたんですけど、ぐちゃぐちゃに散乱していて、駅前に信号も倒れていて、「信号って、目の前にあるとこんなに大きいんだ」と思っ

て。

③【志野さんの旧宅跡】にて

海とは500mくらいの距離で、すごく近いです。家で水着に着替えて行ってしまうほど、海と一緒に生活してきました。今は何もないですけど、ここには4つ家があって、まわりにもズラッとありました。(震災直後やかつての自宅の写真を見せながら)野蒜は浸水が10mくらい、ここはジャブジャブでした。瓦礫がすごくて。自宅は古かったので1年5カ月前に建て直したばかりでした。新しい家に津波が来て一気に持って行かれて、土台しか残ってなくて、上が丸々、どこかに行っちゃって。

タバコが好きな頑固おじいさんで(笑)。両親が共働き、姉も高校生で、帰るとおじいさんと2人いることが多かったんで、近所の人からも言われるくらい「おじいさん子」として育て。足が悪かったので杖をついて、この道路を散歩するのが日課でした。

いつもここで話すんですけど、3月9日、震災の2日前に地震があって、津波注意報が出ました。私の家では地震の話は特になくて、いつもの大きい地震だねということで終わってしまって、もし「自分は小学校に近かったら小学校に逃げるから、おじいさんは避難場所に逃げてね」という話をしていたら、助かったんじゃないかなという思いがあるので、2日前の地震を生かせなかったことは、すごく後悔しています。

おじいさんも、何回も声を掛けられたけど「もうすぐ、ほのが帰ってくる時間だから」と言って、長靴を履いて、避難バッグを持って、この道路の真ん中あたりに最後は出てきて。私がいつも登下校、あっちから帰ってくるので、最後はあっちを見て「ほのが帰ってきたら自分も避難する」と言い残したみたいです。それだけ自分のことを思ってくれていたと嬉しかった反面、けんかも多かったんで、何で自分を待っていたんだろうという悔しさがいっぱい、最後はおじいさんが立っていたこの場所でお話すると決めています。



写真1 おじいさんを語るほのかさん



写真2 自宅跡地にて調査団と

—おじいさん、逃げる用意はされていて……

自宅の片付けをしていて、何回か声をかけるうちに、逃げる準備はできていたみたいです。雪が降っていたので傘も持って、いつも持ち歩くバッグ、ジャンパー、杖を持って。見つけたときもジャンパーを着て、強い波で流されてすごい傷もついてたんですけど、胸ポケットにはタバコとライター、携帯が入っています。

—見つけたのは、どれくらいたってからでしたか。

2週間後ですね。避難所にいて、知り合いの消防団の方から親に電話が入って、五男で「いつ」と呼ばれていたんですけど、「いつかかもしれないから、今すぐ来い」と言われて、田んぼで見つけたみたいです。家の壊れた壁もそこで見つかった。私はどうしても信じたくなくて、会いに行ったら亡くなったことを認めることにもなるので、決して行きませんでした。火葬ができなくて土葬で、市役所からの電話で順番が回ってきてしまって。親から「土葬の後は会えないのでこれが最後だよ」と言われ、遺体安置所に行きました。

—おじいさんは何歳でしたか。お仕事は。

このとき 65 歳ですね。若いころは農機具の会社に勤めていました。このころ、午前中は近くの病院にリハビリに行って、帰ってきて家にいるという感じでした。

—おじいさんっ子でも、小学校高学年にもなると言い争いとかあったでしょう。

高学年になるにつれて。厳しい頑固おじいさんで(笑)、家で騒いでいると厳しくて、方言で「しずね!」つて。すごい、怖かったですね。けんかもしたんですけど、震災後に、病院のお友達にいつも孫の自慢をしていたと聞きました。習い事で賞を取ったとか、いろいろな人に「孫自慢がすごかった」と聞いて「そうだったんだ」と思いますね。

—本人には厳しいのに。

裏では(笑)。感情を出さないタイプなので。あんまり褒めもしないタイプでしたね(笑)。

—おじいさんから昔の津波の話聞いたことは。

(1960 年の) チリ地震津波、おじいさんが小さいころに来たという話は聞いたことがあって。夜ご飯の時に「ちょろちょろ水が来て、あそこの山に逃げたんだ」と聞いて、「津波って、水がちゃぷちゃぷ来るんだ」と思ったんですけど、思い出話を聞いている感覚で、自分の身に置き換えたことはなかったです。「じゃあ、次のときどうする?」という話にできていたら、結果が変わっていたかもしれないので。おじいさんを悪く言っているわけじゃないんですけど、「またあるかもね」という話に変えられていたら。

—家族がてんでばらばらに逃げる「津波でんでんこ」という言葉がありますが。

本当に「でんでんこ」は大事だと思っていて。親が子どもを心配しないで自分だけ、というのも難しいと思うんですけど、信頼がないとできないなと思っていて。当時、勝手にお互い逃げるというのができたのかなと考えたら、話し合いも何もしていなかったの、多分できなくて。日ごろからそういうのがないと急にはできないことだなと思います。

—おじいさんに会いに行かれ、どういう思いでしたか。

第一声は「ごめんね」ということが自然に出てきて、自分を待っていたという後悔なので、それで亡くなってしまったのは申しわけないなという気持ちがあったのと、おじいさんは最後まで自分の心配をして亡くなったんじゃないかなと思ったので「生きているよ」という報告をしました。姉は泣き崩れて、おじいさんじゃないと言いつづけていましたね。

—お 2 人を紹介した「MEET 門脇」の動画では、おじいさんは口が開いていらしたと。

すごい苦しそうで、口を開けていたので、勝手な想像ですけど、最後、自分の名前を呼んでくれたのかなと考えたら、やっぱり「ごめんね」と言うしかなくて。いろいろな感情があって、あんなにふだん怒ってけんかもしたのに、何で最後まで待っているんだよという怒り、待っていてくれたのはうれしいという気持ちもありつつですね。震災後に聞くと「こんなに可愛がられていたんだ」という思いもあって。今はもう遅いので生きているときに伝えなきゃいけないことは伝えなきゃいけないし、亡くなってからでは遅いと身にしみて感じているので、生きる命についても教えてくれたのはおじいさんだと思います。

—今は、感謝の気持ちですか。

語り部をさせてもらうきっかけ、伝えなきゃというのも、おじいさんが亡くなったことが原点だし、全国に行って、いろいろな方と出会わせてもらったのも、もとをたどればおじいさんだと思うので、それはもう感謝ですね、本当に。

—今まで何回こういう機会ありましたか。

何回だろう(笑)。月に 2~3 回やるときもあったので、50 回ぐらいかな。コロナになってオンラインが多くなって。出向いた遠くは高知ですかね。南海トラフのところから呼んでいただいて。おじいさん世代、

消防団の集まり、同年代や修学旅行、子どもに話したこともあります。「実際に聞くと全然違う」、「来たい」と言っていただけでも多くて。

—語り部のきっかけ、もう少しお話しただいていいですか。

進学した石巻西高校は防災教育に力を入れていて、兵庫の舞子高校の生徒と交流する機会があったんですよ。自分の体験も話すようになって、自分の中で整理できたり、話を聞いてよかったと言ってもらえて、「伝えるって大事かもしれない」と気づきました。知り合いの上の世代が話しているのを見て「自分にも何かできないかな」と思い始めました。

—語り部はいつから始めましたか。

高校2年、2016年からですね。同級生の中で私が早く話し始めたら、ほかに話す人も出てきて、そこで初めて知る体験もあって。話してみる大切さ、「この人はこうだったんだ」となって、相乗効果はあると思いますね。それまで「話しちゃ駄目」という雰囲気もなかったんですけど、あえて話す場もなかったですし、暗黙の了解じゃないですけど。

—全国で防災の講話をしている安倍志摩子さんのお話を高校のときに聞いたとか。

語り継いでいる姿を見て「すごいな」と感化されたこともありますし、この活動、志摩さんの影響も大きいです。私がちっちゃいころから面倒を見てくださっている方で、家も近くで、家族ぐるみで知り合いでした。

—おじいさんとの関係で、この活動にはどんな意味を込めていますか。

ずっとあるのは、おじいさんの死を無駄にしない。自分の帰りを待っていたので、何かしなきゃいけないというのはあって、責任を持つじゃないですけど、自分を待っていてくれたからこそ、生きている自分が今後もずっとやっていくんだろうなと思います。

—「そこまで、自分を責めなくていいよ」と言われたことはありますか。

家族も「別に、ほののせいじゃないんだよ」とは言ってくれて、そうかもしれないですけど、やっぱり気持ち的に、もう少しどうにかできたかも、というのは消せないの、それは。自分の使命なのかなというのはあります。

—お話が今のような形にまとまるまで、試行錯誤されたでしょう？

伝えたいことがまとまったのは1年くらい、やってからですね。流れがつかめてきて。来るたびに思い出すこと、新しく話したいこともあって毎回変わるんですけど。今回のように鮮明な質問は初めてで、いろいろ思い出してよかったです（笑）。いつも、時間も限られていて教訓がメインになって、内容も決まっちゃうので、今日みたいにおじいさんとの思い出を話す機会がなかなかなくて、「こんなにいっぱい、あった」と思って。

—おじいさんと、小さいほのかさんが一緒にの写真はどなたかの結婚式の時でしょうか？

母の妹の時ですね。

—聞いていると、おじいさん、こんなVサインする人ではなさそうですね。お酒かな？

この写真、違和感がすごいです（笑）。Vなんてしないんですけどね。

—ふだんのぶつかるきっかけ、おじいさんの方からでしたか？

そう（笑）。怖かったですね、もう。不器用なんですよ（笑）。一発がでかかったです。雷がすごかったので（笑）。

④【造成された野蒜地区の高台、新市街地のカフェ】にて

—野蒜も、訪れるたびにどんどん変わっていますね。

最近も家族で「この家、何々さんだっけ」、「あそこ、何があったっけ」と思い出せなくなって、「こうやって忘れるのが進んでいくんだね」という話をしたばかりです。私も、おじいさんの声が正直思い出せなくなって「悲しいな」と思います。

—前の町並みを知らない人に「家が少ない」という感想があるとのことでしたが。

「こんなに少なかったんですか」と言われると「違うんです」と伝えたいけど、自分がその立場でも確かに信じられませんが、簡単には想像できないからこそ、少しでもイメージを持って帰ってくれたらいいなと思っていて。来てくれるだけでありがたいですし、来てくれたからには絶対、何か持ち帰ってもらいたいと思います。

—今年（2021年）は10年ということで取材も多かったそうですね。

「10年、どうですか」と聞かれるのはすごい嫌で、10年だからどうという変わりはなく、答えづらい質問でした。取材の方が、縮めてほしいコメントとして「10年たってどうですか」と強調されることが多くて、この人たちは関係ない普通の毎日で、3月11日もまた同じ日で、みんな、そこを意識して、どうこうはないんじゃないかなと思います。

—3月11日、いつもどうされていますか。

家族でこの場所に来て、2時46分に手を合わせるのをずっとやっていますね。おじいさんが見つかった場所に線香をあげることもやっています。これからもそうかなと思って。

—大学と、この活動は。

東北福祉大の総合福祉学部の福祉行政学科でした。割とみんな知っていて、友達も応援してくれたので、気にせずできましたね。友達を連れてきたこともありました。

—4月から社会人になられて、お仕事は。この活動を続けるのは大変でしょう。

仙台の一般企業で事務職をしています。今まで通りはできないというのがあって、土日にできると思っていたんですけど、仕事を始めると、その土日が貴重で難しいですね。平日にできるかと言われたら厳しいですし、やっている人はすごいなと思います。でも、全くやめるというのではないので、ちょっとでもやめますというのではないですね。

—進路は、この活動とは特に関係なく…

「全国で語り部しているのに、地元にとどまるのか」、「いろいろできるのに、いいのか」という方もいて、そこまで入ってくるかと思って（笑）。防災、防災と押しつけというか…。

—話の内容やパワーポイントは毎回変えますか。

基本的な話は決まっていて、聞きたいことを言ってくださることもあるので、合わせて膨らませたり、子どもだったら学生のときの写真を多く入れたり、手は変えていますね。

—一人でお受けになっているのでしょうか？ どうやって持ち込まれるのですか。

記者さんから紹介されたり、3・11メモリアルネットワークを通して依頼されたり、団体で来てくださった方と名刺交換して、そこから派生してというつながりもあります。

—受け皿となる団体をつくろうかと思ったことはないですか。

そこまでは。最初はグループのような感じで始まったんですけど、報酬のためにやるのは嫌だったし、ちょっと違うなと思って。だったら自分でやっていた方が、となって。

—当時、6年生。あの時の体験を自分の言葉で語れる、最後の世代かもしれません。

低学年になると、当時は怖かったとか、地震強かったとか、単語になってしまうとよく聞くので、鮮明に話せるのは自分たちの学年くらいなのかなというのは感じます。

—語り部と言われることはどうですか。

気楽に話してみようかなぐらいのつもりで始めたので、語り部という意識はなくて。語り部、あまり好きじゃなくて「語り部、志野ほのかです」というのが、ちょっと嫌なので。

—自分ではどういう言葉、使いたいですか？

難しいですね。語り部と言うと硬いし、特別扱いされると嫌だなと思って。意識が高くて防災をやっている人みたいなのが嫌なので。語り部と言わなくても、そういうことをやっていない同級生でも、話して誰かに伝えたら、語り部と同じじゃないですか。

—東松島で活動する若い世代、熱量を維持している印象です。でも、気負いも感じなくて。

確かに絶対やらなきゃという感じはみんなあまりなくて、時間があるときにやる、だから続いているのもあると思います。私も、そんなに背負わなくていいよとアドバイスをいただきました。高校で始めた当初は、取材がすごくて「もうやりたくない」という時期があったんですけど、乗り越えたら落ち着きました。

—取材攻勢。やりたくなくなっていましたか。

一時期すごくて、高校生だったので、学校を通して来ることが多くて、そのたびに先生から呼ばれ、学校にも申しわけないなど。3月が近くなるといろいろ取材があったりして。部活もしていたので、削らなければならないとなると「やらなきゃ、よかったな」って悩んだ時期はあったんですけど。相談できる大人がいて、そういう方々が背中を押してくれたことが何度もあったので、それで続けられたというのがあります。

—自分の思いが伝わったという実感、活動でよくわいてきますか。

話を聞いてくださった県外の方が、地域の人たちに話して、活動しましたというのを聞くと「しゃべってよかったな」と思います。フェイスブックでつながった方から「すぐ孫に言いました」、「家族で確認しました」と教えていただくとうれしいですね。

—仙台に出勤されている毎日ですが、就職で地元に残るか、出るのかは考えましたか。

私は地元に残りたいのが強くて、どこかに出る選択肢はなかったですね。この活動を続けたいのもあって。なくなったからかもしれないけど、同級生も地元が大好きなんですよ。引越しても自分の地元は一つしかないですし、思い出がある場所は一つなので。

—ここを出る選択肢はなかったというのは、震災の影響が大きいですか。

間違いないですね、それは。地元に対する思いが強くなりました。震災が起きるまでは、そんなに思い入れはなかったです。震災があったからこそ、地元の良さに気づいたり、野蒜の海が本当にきれいだと改めて思ったり。よく「津波があったから海を嫌いにならない？」とか「海の近くに住みたくないって思わない？」と聞かれますけど、そんなことなく「こんなに自分は好きなんだな」と気づきました。昔は地元が家族みたいで、近所もあったかくて、地域の子どものことを知っていて「誰々の子だね」と、みんなで守るような環境でした。今はそういうのがないので、本当にいいところだったなと思いますね。

—近所の方がおじいさんに避難を促したのも、野蒜ならではの助け合いだと感じました。

親戚というのもあるんですけど、でも、ここは寝たきりの方がいるとか、周りの家を知っているの、ほかの家でも一緒に連れていったりして、勝手に一人で逃げてはいなかったですね、野蒜は。そういうのもあって「ああ、よかったな」と。

—離れて今、思うことはありますか。

寂しいのはもちろんあって、語り部のときしか来る機会がないので。でも、離れてもっと好きになったというか。東松島や野蒜の良さが分かって「やっぱり一番だよな」という話は家族でよくします。離れたからこそ、ここへの愛が強いですね。同級生は中学に上がった段階でバラバラになってしまい、この高台ができて戻ってきた人もいます。久しぶりに会うと「野蒜、よかったよね、戻りたいよね」という思い出話はよくしますね。

2. 谷川浜・ホヤ漁師 渥美貴幸さん

東北の特産「ホヤ」は甘味、酸味、塩味、苦味、うま味という「五つの味」を兼ね備えた海の幸だ。その独特の形状から「海のパイナップル」とも呼ばれる。東日本大震災をきっかけに、この珍味にひかれる人々が東北以外でも増えてきた。宮城県石巻市谷川浜^{やがわはま}の漁師、渥美貴幸さんは、地元の鮫浦湾でホヤの養殖をしながら販路拡大やその魅力発信に努めてきた。渥美さんが 2021 年に建てたばかりの加工場で10月30日、これまでの取り組みを振り返ってもらった。



写真3 加工場にて



写真4 ほや取扱指南書とは…



写真5 ほや漁の船の前で

—最近のホヤ漁の状況を教えてください。

今年（2021年）はあまり育成がよくはなくて、生産量が少なかったんですね。自分に限らず、ほかの人もそうですけど、全体的に数量が少なくて。でも、去年（2020年）はコロナと貝毒の影響で「4年もの」が売れずに残っていて、余った分を「5年もの」にして、今年が生産量が少ない「4年もの」と合わせてちょうどぐらい、全部はけた印象ですね。全体的な流れでは、前の年からの持ち越しで一応ちゃんと売れたという話ですかね。

—発信された動画では、ホヤの育成が最近ちょっと小さくなっていると。

それはもう年々、全体的に小さくなってきているかなという印象はありますね。

—理由として、競合相手もいて、海が過密で栄養を取り合っている面はありますか。

その印象はあります。ちょっと、減らしていった方がいいかなど。全体的に生産過多になっている部分もあるので、生産量をちゃんと調整することで持続可能に持っていけるのではと思うのですが、なかなか厳しいかなと思っています。

—生産過多の問題は、ほかの浜でも結構聞きます。

南三陸町の戸倉の牡蠣のように、震災後に切り替えたところもありますけど、どうしても震災前の状況に戻すのが目的の一つになってしまっていて。やり方も、過去に戻そうとして、先をちゃんと見て、こうしようという話し合いはできていなかったと思います。

—海が過密になると、何で粒が小さくなるのか、教えてください。

海の中にある植物性のプランクトンを食べてホヤは成長します。ホヤは、カキの3倍餌を食べます。1日に1トンの水を吸って吐くと言われていています。食べる量がすごく多いので、いくら海が広いとはいえ、増えれば増えるほど餌の取り合いになってしまいます。

—プランクトンの取り合いになるといえることですね。

食べるのは植物性のプランクトンで、カキやホタテも同じ餌を食べているので、どうしても循環が悪いというか、あまりにもプランクトンを食べすぎちゃうと、海に入ってくる量が足りないですね。人間がちゃんと調整してやっていくべきだと思います。

—こうした話題は漁師仲間でも出ますか。

船で選別作業をして、大きいところだけ売る状況になっているので、皆さんそんなに気にしていないと思います。業者さんも大きいサイズをほしがる傾向はありますし、漁師さんも大きいもの方がいいものだという考えがあります。最初から網1本で200kgつくらないで120kgぐらいにしておけばいいものを、そこまで考えてやっている人はほとんどいなくて。逆に多く生産しようとなっちゃうんですね。余ってもあまり気にならない。

—限りある植物性プランクトンも、もったいない…。

漁師さんだけ責めるわけにはいなくて、加工屋さんが、小さいのは要らない、大きいのを求めているということもあります。生産過多になっているので、大きいホヤを求めているのは漁師さんだけではなくて、買う側の認識もあるので、一概に漁師さんだけが悪いとは言えなくて。

—調整していくのは難しいですか。

全体を考えたなら数量を減らすのが大前提と思うんですけど、すごく難しく、誰かが減らせれば、増やす人がたぶん出てくるんですよね。1kg100円で売っていたものが、生産過多になって50円になったら「倍つくればいいや」と考えがちだし、単価が上がれば上がったで「また増やそう」となりがちだし、その辺はなかなか「うん」とならないですね。

—小さいホヤに可能性はないのでしょうか。

小さいホヤも食品として扱ってもらえるように、この加工場を建てました。大きいホヤは殻のまま業者さんに出荷して、小さいホヤは自分で加工して出荷します。保健所の許可を取るために必要な物をそろえます。生食用に、むいて出荷するだけのやり方と、むいたものを自分で洗浄してパッケージにして出すやり方もあって、違う許可が必要です。まだ、むき身を自分で梱包して出せるところまでしか許可を取っていないんですけど、加熱調理の設備もつけてお惣菜をつくることも可能です。家族だけでどれぐらいむけるのかとか、この秋、ちょっとだけ注文を取って実験的にやりました。ネット販売と、加工業者さんに直接

むき身の状態で卸すことをやろうと思っています。

—加工業者が買い取る大きさは、大体どれぐらいですか。

買って、自分のところでむく加工業者さんはサイズを気にしないでですね。小さくてもむくので。ただ、殻のまま出荷する、買って殻のまま市場に卸している業者は、それなりに大きいものを求めるので、200 g以上だったり。300 gになると大サイズです。自分はちょっと小さめの 250 g 以下を殻付きで出せばいいなどは思って。

—大きさは違っても、殻の中身は変わらないですか。

はい、小さくてもおいしく食べられると思います。同じ味ですし、時期によって身の厚さが変わってきます。身の厚さに比例して、うまみ成分が多くなると言われているので。単純に大きい方がうまみは多いのかなとは思いますが、食べるときは細かく切りますし、そこまで違いはなくて。それより、殻付きのホヤの鮮度管理をしないと、いくら大きくても臭くておいしくない。大事なのは大きさではなくて鮮度管理。鮮度が命です。

—何で鮮度管理が必要なのでしょうか。

ホヤは生産地の東北で食べられることが多くて、関東ではなかなか見ません。なぜかという鮮度管理ができていなくて、関東だとおいしくない状態で届いてしまうんですね。水揚げして東北から関東なんて1日以上かかっちゃう。その間にもう悪くなってしまふ。昔からある食材なのに、東北でしか広まらないのは、そういうところに理由があつて。

何とかできないかなと思って実験を重ねたら、鮮度を落とす原因は、温度、時間、中に入っているふん、その3つだと分かりました。極力ふんを抜いて、温度をしっかり管理することで、採れたてに近いホヤを関東でも食べてもらうことができることに気づいて。シーズンによって、ふんの抜け方も変わりますし、旬の夏期は悪くなりやすいです。徹底した管理をすることによって、ちゃんとおいしいものが届く。いろいろな料理人さんにも使ってもらっています。ポテンシャルは必ずある。それをどう広めて、伝えていくのかということだなと思っています。

—ホヤは水揚げすると死んでしまうのでしょうか。

死にはしないけど、生きたまま悪くなっちゃうんですね。

—運ぶには、冷凍ではなくて、生きたまま輸送するのですか。

冷凍するなら、殻付きではなくて、内臓などを抜いた状態のむき身に加工しないと。そのまま冷凍すると、中にふんが残ったままです。例えば、この水槽に入れたままでも、ふんを吐いた水を取り換えないと、たまった悪い水を吸ってしまう。中で臭くなってしまう。だから海水を何回も取り換えます。時間はかかるけど、ふんは最初に抜いた方が楽なんです。自分は最初にふんを抜くやり方をしていて、1〜2日ぐらいかかる。それぐらい時間をかければ、結構いい状態で届くんですね。

—生産者で、鮮度管理まで気を配っている人はあまりいないですか。

多分ほとんどいないと思います。ふんを抜くと、時間がかかる上に、歩どまりが悪くなっちゃうんですよ。100 kg 水揚げしても 90 kg とかになっちゃうんです。軽くなる。サイズも気持ち小さくなっちゃう。どうしても見せ方や重さに意識が向かいがちで、漁師さんたちは「その分高く買って」となるんですけど、生産過多でそうもいかないですし、なかなか今の状況は変わらないです。加工屋さんは、ふんを抜いたホヤを自分で確認できないんですよ。そこが難しいところでですね。責任は加工会社さんでも、作業する漁師さん任せなので、漁師さんの質とうまくバランスが取れていないのかなと感じています。

—渥美さんがホヤを始められたのは。

25 歳ぐらいですね。震災の前の年の 2010 年からです。

—鮮度の問題に取り組んだのはいつからですか。きっかけがありましたか。

鮮度の問題は、震災後3、4年してからですね。震災のボランティアで来てくれて、食べてもらった人たちに「おいしい、おいしい」と言ってもらい、すごくうれしくて。こちらからホヤを送ることもして「おいしい、おいしい」と食べてくれたんですけど、中には「送る場合は殻付きではなくて、むき身の方がおいしいよ」と教えていただいた方もいて。

—本音で言ってくれたわけですね。

本音で言ってくれました。ホヤの現状を何とかしなきゃいけないと思って、何が必要なか、ちゃんと知ろうと思いました。「実はね」と言ってくくださる方がいました。「送ってもらっているホヤは、ふんのおいがする。地元で食べるとすごくおいしくて、ふんが入っていても気にならないけど、届いた時は悪くなっている」と教えていただいて、それからですね。「氷を張ったホヤも、溶けて水びたしで送られてくるんだよ」とか、「水はふんだらけだよ」とか、地元では気づかないことを教えてくれたのが外部の方たちでした。それを解決するのは、うちらしかいんです。生産者がそこから始めることに意味があると思うんですね。

—具体的な取り組みを教えてください。

毎年ちょっとずつ変えているんですけど。加工会社と協議会をつくってGI（地理的表示）の商標を取ろうと思っています。うちで宮城ホヤみたいなものをつくって、商標として認められるようにしたくて。ルールづくりは、鮮度管理を基準として。ほかの養殖物はその年に売らないといけなくて、ホヤはその点は楽です。ホタテは翌年に残すと殻ばかり大きくなって実が悪くなる。ワカメも腐ってしまう。銀ザケも翌年まで持たないので、その年にはける量をつくります。ホヤは残ったら残ったで、翌年でも売れるんです。ホヤの基準は大きければ大きいほどいいとなっているので、4年もの、5年ものも残しても売れる。生産を増やすのは楽だけど、出荷のときにひと手間かけようということです。それに見合った価値をつけて出荷できれば、全体の量を減らすのは難しいけど、ちゃんと線引きをして。基準は、大きさではなく鮮度にするのです。

—鮮度管理をきちんとしたものを、認めていく。

海の方もいろいろやりたいですけど、進まないの、そういうところから動きを変えていこうと思いました。GIは、ルールはこっちで決めるんです。「みやぎサーモン」はGI化しています。宮城県の銀ザケで神経締めをして市場を通して出荷するというルールです。そういうルールをつくることで、メディアで取り上げてもらい、宮城県も推してくれる。ホヤを盛り上げる動きをしたいので、取っておいた方が絶対いいと思って。

例えばテレビでホヤが一瞬はやっても、鮮度管理をちゃんとしないと悪いホヤばかりになる。一度盛り上がると、漁師がばんばんつくっちゃうんですよ。結局また悪いホヤが流通してしまう。いいものより悪いものの噂の方が広まるのは早くて、知らない人が食べて「まずい」というダメージの方が大きいです。また生産過多になってしまい、売れ残ってしまう悪循環にしかならないので、鮮度管理をきちんとして、世に出すところから。10年たって、今さらという感じですけど、やってみようかなと。

—「^{せんびつりょう}鮮美透涼ほや」と書かれたカードを今いただきましたが。

個人で商標登録をしました。「商標を取った方がいいよ」と言われて、急いだんです。ロゴや名刺もつくって、来年から本格的に表に出してやっていこうと思っています。

—鮮美透涼、どんな意味を込めましたか。

やっぱり「夏に涼しさを感じてもらいながら食べていただきたい」という思いはあります。

—夏の清涼感。こだわってきた鮮度・新鮮の「鮮」も当然入れて。

はい。そして美しく。

—カードに、素敵な模様が。これがロゴですね。

ホヤは五つの味がありますから、五角形で5つの三角マークです。船の上でホヤが散らばっているイメージを重ねました。色は、ホヤのブランドは、赤が多いんですけど、青も欲しいとこちらで注文して。

—カードは、水揚げの日付を記入するようになっています。その隣には「活かし込み」という欄もありますね。

ちゃんと日にちを書きたいなと思って。水揚げ日と、「ふん抜き」とは言わずに「活かし込み」という表記で「何時間、ふんを抜きましたよ」と、ちゃんと伝えたくて。一度水揚げしたホヤをまた海に戻し、吐かせてホヤの胃を空っぽに近い状態にして出荷するんです。最初は体内のふんを抜いた時間を伝える目的だったんですけど、せっかくなので何か宣伝にも使えないかと考えました。

飲食店さんには、おれがホヤの鮮度管理をするのにすごく力を借りています。その飲食店さんがコロナで大変だったじゃないですか。何かできないかなとずっと考えていて。気づいたんですけど、ホヤにこだわってくれるお店は、ほかの何を食べてもうまいんです。おいしいホヤを出してくれるお店は、いろいろなものにこだわっている。自分がつくった「鮮美透涼ほや」を扱っているお店は、ほかの何を食べてもおいしい指標にしたいなと思って。飲食店のオーナーさんに伝えるだけではなくて、このカードサイズにして、カウンターに飾ってもらえないかなと思って。ちゃんとホヤにこだわっているお店は、ほかの物もおいしいよと知ってもらえるきっかけにならないかなと思っています。

—消費者にも広まるといいですね。

おれがやろうとしているのは、関東圏や離れたところでホヤを広める活動です。知名度を上げて国内でもっと流通させたい。「谷川浜」と入っているんですけど、これがある程度認められたら、ほかの浜でやる気がある漁師さんにも伝えたいなと思っています。雄勝産とか、寄磯産とか書いて、ほかでも使ってもらえるブランドになればいいなと思って。そこで初めて味くらべができると思うんですよね。まずは自分がやって、ある程度形をつくったら、漁師ブランドとして広めていきたいと思っています。

—日本で生産するホヤのうち、宮城県産の割合は2020年の統計で47%でした。

震災の前は8割ぐらいでした。

—震災前、そのホヤを多く買っていたのは韓国でしたが、今もストップしています。

原発事故の風評被害ですよね。最初に放射能検査をしたのは、おれなんですよ。漁協に持ち込んで検査してくれと言って。全然出なかったんですね。一応「安心!」と伝えたんですけど、韓国は輸入しませんでした。いまだに続いています。ホヤをつくるのはできて、生産量が戻ってきていますが、売れなくて、なのにつくり続けている不思議な状況です。2016年、17年に、廃棄した分を東京電力で補償するので、余っているホヤを廃棄してくださいとなったんですね。

—生産過剰となって廃棄に踏み切り、補償金を受け取った漁師さんもいました。

おれは捨てなかったです。

—そのいきさつを。

父親は漁師ではなくてサラリーマンです。自分が漁師を始めたのが2008年でした。フラフラした時期もあって、高校を卒業してから就職したことは1回もないです。ただ、この地元が好きだったし、自分は漁師さんにあこがれていて、大好きな漁師さんもいて、その方みたいになりたくて。代々、漁師の家ではないので、周囲から「無理」と反対されましたけど、不利を承知で始めました。自分は経験がまるっきりない。地元の同級生は、みんなお父さんが漁師さんで、全然かなわないなと差を感じていました。どうやったら追いつけるかなと考えて、この人たちの知らないことを学ばばいいんだと思いました。ここ（谷川浜）ではできない海の仕事、ほかの浜のいろいろなやり方を見てこようと思って、20歳くらいから5年間くらい、勉強のためにいろいろな船に乗りました。北海道でサンマ、福島でタラ。水産業界を片っ端から学んで帰ってきて。2010年にホヤを初出荷しました。

その翌年に東日本大震災で津波が来て、船も何もかも失いました。一時はあきらめて陸に上がろうかと思ひ、仙台でちょっと仕事をしたんですけどやっぱり合わなくて戻ってきて。その時にやめておけば傷も浅くて済んだんですけど、このままやめるのは悔しくて。うちの息子はどう見るだろう、漁師をまたやろうと腹をくくりました。

そんな自分が、韓国は買いません、捨てたら補償しますよという話にはどうしても乗れなかった。戻ってきた自分の意味や理由と、それをやってしまうことは、違うのではないかなと考えました。格好いい漁師さんの先輩がいて、その人たちにあこがれて始めたのに、それだったら別に戻ってこなくてもよかった。お金はすごく魅力だったんですけど（笑）、ちょっと意地で、かたくなにやらないと言いました。

—廃棄した分に対する補償と、減収に対する補償と2種類あるそうですね

廃棄は2年間だけで、今は普通に出荷していますけど補償は続いています。おれは廃棄の補償はないんですけどね（笑）。

—お子さんに、自分の背中を見せたい部分もありましたか。

ありましたね。中学2年ですけれども、息子に漁師を継げと言う気はなくて。継いでもらったら、もちろんすごくうれいんですけど、でも、それは自分で継げと言うのではなくて、震災から20年たつまでに、ちゃんと進路として本人が継ぎたいと言ってもらえるような水産業にしたいという思いがあって、そのために頑張っている感じです。駄目なものを継がせる気もないですし。ただ、やっぱり格好いいとか、面白そうとか、ちゃんと稼げるとか、そういうところを、子どもたちに見せていきたいなと思って。だから、なあなあでやりたくない、自分が納得しないところではしたくないというのが強くありまして。

—韓国が駄目という中で、販路はどのように対応してきましたか。

新参者なので震災前から自前の販路をつくってきました。業者を回り、できるだけ人に会ってきました。ただ、全体的に単価が下がっています。

—廃棄に対する補償が市場価格を下げた面もあると言われています。

うちは小さいホヤでも買ってもらわないと、生活が大変です。うちはキロ100円で売っているのに、80円でいいとなると、そっちに流れちゃう。思いがある加工屋さん、値段も下げずに買ってくれます。最近生協さんでも扱ってもらうようになりました。水産会社の系列会社の社長さんにかわいがってもらい、人に助けられています。

—生協は、インパクトありますよね。

生産者さんのことを考えてくれていて、高くてもちゃんと扱ってくれるし、いいパートナーとしてやらせてもらっています。生協さんでは「朝どれホヤ」という商品があって、夜中の1時、2時に水揚げして、ここを4時くらいにスタートします。採れたてをその日の朝、オープンと同時に店で並べます。鮮度が違うと言ってもらっています。

—「渥美さんのホヤなら大丈夫」という言葉は聞きますか。

そのようにまあまあ言ってもらっていますし、ちゃんとしたものを広めたいですね。スーパーさんにも顔を出しますし、売り場を見たり、ものの状態を見たり。お店側の要望に応えたり、どう見せるかが重要だと思うので、でも、そこはあまり口出しできなかつたりするんですけども、ちょっとずつでもそう言ってみたり。

—谷川浜に戻って漁師を始めるとき、ホヤ以外の選択肢はなかったですか。

いや、もともとおれは漁師がやりたい意識だったので、別にホヤじゃなくてもよかったんですよ。ただ、やっぱり震災前にホヤを始めて、震災で悔しい思いをしたので、またやりたいという思いが強まりましたね。谷川浜はホヤの赤ちゃん、種（天然種苗）が採れる貴重な海です。経費がかからないで始められるの

が、最初のきっかけでしたね。

—そんなに経験がなくても、漁ができる余地があったということでしょうか。

そういうのもありますかね。当時は韓国輸出があったので、そんなに大変じゃなかった。ただ、震災前から、韓国輸出だけじゃちょっと面白くないなという思いもありました。

—谷川浜でホヤに関わっている漁師さんは。

10人くらいです。震災でやめた人もいれば新しく始めた人もいる、ホヤに関して人数はそんなに変わらないです。

—みなさん、ホヤ以外の漁は。

ホヤとホタテが多いですね。あと、カキ。自分もカキの養殖をしていて、まだ始めて3、4年ぐらいです。出荷もそんなにしていないので勉強中ですね。震災前のここのカキは結構密でした。「何十ラインもおれはやってたんだぜ」と聞きます。同じ場所で、自分は筏の台数を10分の1ぐらいに減らしています。ものは結構評判がいいですね。

—渥美さん、地元で何か役職をしていらっしゃいますか。

漁協の谷川支所の役員をやっています。

—その若さで、漁協の役員は珍しい？

いや、多分相当珍しい。相当若いと思います。

—浜の住民数は。

6世帯です。人を増やしたいし、それには産業がしっかりしていないといけない。もとは60世帯ぐらいで、だいぶなくなりました。通いの漁師さんがいっぱいいます。昔は住所がないと漁業権がなかったんですけど、震災特例で効力があるようになっています。

—漁師を始められたころ、谷川浜の実家にいらしたんですか。

いや、こっちに（住民票は）置いていましたけど、自分と妻と子どもたちは（石巻市）渡波に住んでいました。それこそ当時は通いで。逆に当時は「通いで漁師なんか無理だ」とさんざん言われました。今は逆に、おれがこっちにいて、みんなが通いで来ています。「できるじゃん」と思いますけど。

—谷川浜で家を建てたのが？

3年ぐらい前ですかね。それまでは通いで。

—浜の人口を増やしたわけですね。

貢献しました。子どもは中2と小6と小2ですね。男、女、男です。

—ホヤを初めて食べた人の反応の中で、印象に残るエピソードはありますか。

イメージが変わったと言ってくれる人が多いので、その都度やっぱりうれしいですね。

—漁師へのイメージが変わった？

ホヤそのものですね。でも、自分自身はまだまだとっていて、（震災後に宮城県の手漁師や支援者でつくった団体）「フィッシャーマン・ジャパン」と一緒にやっている人たちなんかは「ああ、すごいな」と思って、年下でも尊敬しています。課題は、後継者というか、自分たちがやってきたことを引き継いでやろうという地元の漁師さんがいないんですね。こっちに移住して、やろうという子たちは多いんですよ。東大卒もいるし、水産業に魅力を感じている子はいっぱいいるんですけど。世の中では20代で第一線で活躍している人はいっぱいいるのに、水産業は平均年齢が60歳ぐらいで、まだおれは若い方で。ちょっとずつ、

変えていかなければいけないなとは思っていて。この10年で、0から1はできたかなと思うんですね。次をつくれる人間を育てていかない。

—渥美さんを目指す若者が出てきているのでは。

まあ、そうですね。ほかの浜の若い子で、そう言ってくれる人は多いですね。ただ、どう思われているかわからないですけど、おれは役員に選ばれて、目立っているので(笑)。父親が漁師だったら、周りの目はもっと違うのかもしれないですけどね(笑)。

—試行錯誤を重ねられてきた中で、支えになったものは何ですか。

もう、それは外部の人たちですね。一緒にやっている、(全国のほやファンでつくる)ほやほや学会やフィッシャーマンの人たちですね。去年インターンで来ていた子が、水産業を変えたい、現状は駄目だと思って違う浜に行ってみたんです。でも、地元の人が望んでいないのに「これが正しい」と自分がよそから来て言っている、そう悩んでいました。「言い続けて、共感してくれる人が地元にいるなら、一緒にやっていきたい考えでやっています」と言っていて、頼もしいなと思いました。

—いま話題に出た、ほやほや学会という一般社団法人の理事もしていますね。

ほやほや学会、名前からしてふざけていますけど、まじめな団体です。声をかけていただいて。ピースボートさん(現:ピースボート災害支援センター)が、ホヤの販路拡大を目標に立ち上げて、ホヤの魅力年全国に広めて全国で売れるように活動しています。

—新鮮なホヤのおいしさ、渥美さんはどう表現しますか。

本当にほやほやみたいな感じなんですよ。例えができないんですけど。甘くておいしく、独特な味わいがある、そう説明することが多いですね。

—魅力を知ってもらうことと、繰り返し強調されてきた鮮度管理はセットですね。

いかに本当のポテンシャルを伝えるかが重要です。そう考えたときに鮮度管理は絶対に必要ですね。

—ポテンシャルあるホヤ、渥美さんがオススメの食べ方は。

天ぷらはすごくおいしいので、お勧めしています。唐揚げもいいです。あと、昔からの食べ方では、殻付きのまま蒸すというのがあります。蒸しホヤですね。殻ごと一緒に蒸した方が、だしが出るんです。

—シーズンの春と夏以外は、どう食べたらいいでしょう。

冬は(殻を外した)むき身のホヤを食べてもらった方がいいかなと思っています。ホヤは年末に産卵するんですよ。その時期が近づくとつれて、だいぶ身が薄くなってきて、味が落ちていきます。食べ方もかなり限定されます。であれば、夏の時期に、大量に加工してむき身にして、冷凍してストックしておいて、それを冬に売るやり方がいいかなと思います。生産過多になっているので冬に食べる文化をつくることができるとし、それは可能かなと思っています。

—冬の食べ方のオススメは。

しゃぶしゃぶですかね。あと、串焼きにもらったことがあって、すごくおいしかったけど、火の加減とか難しいかな。焼きホヤにしても。

—韓国は、ホヤをどうやって食べますか。

韓国は生で食べます。キムチにするという噂は違って、コチュジャンにちょっとお酢を入れたチェコチュジャンというたれに漬けて、ほとんど生で食べています。日本人も生で食べることが多いですね。

—温暖化、気候変動の影響はこの海にもありますか。

水温は全体的に高いですし、ちょっとした変化はありますね。ホヤはまだいいんですけど、ホタテは25

度まで上がると死んじゃうといえますから。でも、この湾は、割と水深があるんです。多少の対策はできると思うし、自然環境のことは考えていかなければいけないですよね。去年、ホヤで貝毒が出たのは何が影響しているのかは分かりません。ここ数年、雪があまり降りませんし、夏に雪どけ水が流れないのは、いろいろ影響してくるかなと不安がありますね。

—先ほど言及されたコロナ禍の影響、どう感じていますか。

コロナは大変ですね。売れなくなっているので、どうしようもできない状況の中で学びの時間に使ったり考えたり、していますね。飲食店さんは厳しいけど頑張ってもらいたいですし、自分なりにできるところで、一緒にやっついていこうと。ホタテ、カキと違って、コロナのようなことになると、ホヤは最初に関わなくなっちゃうんですね。

—買わなくなっちゃう？

業者さんにしても、スーパーさんにしても、置くスペースに限りがあって、消費量が落ちた時に、ホヤはそこまで重要じゃないというか。鮮度がいい期間を延ばせば扱いやすくなるかな。どこの飲食店さんも今、賞味期限が長いものばかり置くようになっているので、賞味期限が長くなれば、確かにいいかなと思います。

あとはファンづくりですね。コロナ前まで何となくファンづくりしなきゃと思っていましたけど、コロナになってそれしかない。絶対にやらなきゃいけないと思っています。

—渥美さんのホヤだから、買いたいというファン。

そうですね。この浜のファンを増やすでもいいですけども、ネットとかそういう手段を使って、知ってもらえるところかなと思っています。もっと高みを目指してはいるんですけど、体一つで足りなくなってきたところがあるので、しっかり、もうけも考えて。

—ホヤ漁ピークの夏の1日を教えてもらえますか。

ピークの時は夜の9時ぐらいから海に行きます。水揚げして午前1時ぐらいに、ここに持ってきます。選別した後、カキを採りに行ったりもします。帰ってくるのが朝の7時ぐらいですね。加工屋さんやスーパーさんが動く前に選別をしなければいけないので。養殖いかだのところまでは船で5~15分ぐらい、すぐです。夜のうちに船で1個ずつばらして、大きさだけ、ここで選別します。一晩で800キ。から1ト。ぐらいのホヤを扱います。

—家族と夕食をご一緒に食べて、寝かしつけたころに出ていくサイクル…。

そんな感じです。でも、中学生は9時に寝ないですね。寝たふりしますからね。

—夜中の作業を終えて、朝帰ってきたところに、子どもたちが起きて。

学校へ送り出します。昼間、筏の管理とか仕事があるときは、それをします。疲れてたら寝ます。来年から加工もやるとなると、日中ここで作業する時間も出てきますね。

—持ち船は。

4艘あります。カキ用とホヤ用の大きい船が2艘あって、小さい船が2艘ですね。震災後に用意したホヤ専用の船は1,200万円ぐらいでした。漁協でいろいろ補助金を出していただいて9分の1で買いました。

カキ用の船は中古で、ただでいただきました。知り合いの漁師さんが新しい船をつくるので、古い船は要らなくなつて。小さい2艘のうち1艘は陸に上がっていますし、1艘はアワビとり用です。

—渥美さんの船は大音量の音楽がかかっていますが、そんな船はほかには。

(笑) ないと思います。ちなみに、鮮美透涼のカードは、CDのジャケットサイズなんです。音楽好きというところで。

ーロック少年で、中学、高校はバンド活動にのめり込んでいたとか。

中 1 の時、漁師さんの手伝いをしたアルバイト代でベースを買いました。部屋に毛布張って練習しましたが、隣近所が離れているので迷惑にはならなかったと思います。

3. 空の駅プロジェクト 武田文子さん

宮城県東松島市の JR 陸前小野駅に近い、小野駅前仮設住宅の集会所で 2012 年、靴下によるユニークなキャラクターが生まれた。サルのぬいぐるみ・人形で、その名も「おのくん」。米国で大恐慌時代、生活が苦しくておもちゃを買ってもらえない子どものために、お古の靴下に布を詰めた「ソックモンキー」が元祖だ。おのくんの作り手は東日本大震災で被災した仮設住宅暮らしの女性たち。ひとつひとつが個性的で、全国のファンが連日 20 畳ほどの集会所を訪れ、「マイおのくん」を購入、「里親」になった。仮設や集会所が撤去された現在も、陸前小野駅前に 2015 年にできた活動拠点「空の駅」などで製作は続いている。被災地では珍しい女性の自治会長として小野駅前仮設住宅を切り盛りし、作り手や各地のファンとおのくんを育ててきた武田文子さんに 2022 年 1 月 15 日、お話をうかがった。



写真 6 空の駅



写真 7 インタビュー模様



写真 8 おのくんはどれも 1,000 円

ー集会所に初めて行った 12 年、おのくんのセンス、自治会長としての活躍に私は驚いて「震災前何をされていましてか」とお尋ねました。事業や商売をしている方だと思いました。

してない、してない。

—「いやいや、普通の主婦だよ」とおっしゃって。

はい、それです。

—2011年3月11日のあの時は、東松島市野蒜の新町のご自宅にいらして。

そうです。平屋でした。その家に入ったのが30代の時ですね。おうちの内職でミシンを使っていて、それで広い場所が欲しくて。空いていた貸家があって。

—おのくんのような手仕事を、震災前からされていたんですね。

はい。

—震災のころは、ミシンで何を仕立てていらっしゃったんですか。

岩手の縫製会社からいただいた部品の縫い物をしていたね。パーバリーのコート、あれのフードを私がやっていたの。内職で、フードをつくっていた。身頃は縫製会社さんでつくって、1日100着はフードをやっていました。朝3時起きが普通でしたね。夕方は疲れるから段取りに入って。3時間ぐらいいかな、寝られるのは。

—そのころから「めんどくしえ」と言いながら？

はい（笑）、それはそうだ。

—内職は何年ぐらいやっていましたか。

20年、30年やっていたかな。最初は（東松島市の）小野の縫製会社にいたんです。子どもが生まれて、内職させてほしいと言って、その会社が初めてミシンの内職を私に出したの。それから内職をずっとやっただね。いろんなところからお仕事をもらいながら。

—コロナ禍で今はやりの、在宅でお仕事をしていたんですね。

そうです、在宅1号で。ミシンを会社から借りて、ボタン付ける手仕事は苦手だから。やっぱりミシンの方が得意だね。内職の仕事は糸屋さんたちがよく紹介してくれたね。

—内職の作業をする人が足りないのかな。

続かない人が多いからね。値段の割に労力が大変だから続かないんですよ。忙しいと私が引き受けて、近所の作業できる人に振り分けて、3、4人一緒にやってもらいました。

—ほかの人が続かない内職を続けた秘訣は何ですか。根気強いとか。

違う。1人でやろうとしないだけ。いろんな人を巻き込んで、手伝ってもらって。力にもなるし、励みにもなるし、途中でやめるわけにもいかないから、続くという感じですか。

—それは「おのくん」と似ているような気もします。女性たちを巻き込んで。

そうそうそう。同じようなものかな。

—東日本大震災の時に戻りますけど、当時一緒に暮らしていたのは。

娘と孫2人、4人だったね。地震の時、私はおうち。娘と下の女の子は中学の卒業式が終わって、かんぼの宿の謝恩会に行っていました。男の子は水産学校の研修でハワイだね。

—強い地震、どうされましたか。

すごい揺れで買ったばかりのテレビ押さえて、玄関を開けて。窓がエックス状に揺れたね。岩山の石も落ちてきた。家の中は茶箆箆とかひっくり返ってぐちゃぐちゃだけど、外は歩けたし、どこもおうちはつぶれていなかった。近くのおばあちゃんが1人では歩けないと思って、車に乗せて避難しました。

—家の中はぐちゃぐちゃだけど、大丈夫だから、とどまろうとは思わなかったですか。

思わないね。津波という頭はなかったの。ただ、あまりのひどさにいるわけにもいかず、人が集まるところに行った方がいいかなと思ったね。

—車はどこに向かいましたか。

長音寺の上の山だね。避難場所が決まっていたんですよ。志野さんの家（本号で登場する志野ほのかさん）の方に長音寺があって、車で脇を通過して、小高い丘へ逃げた。すごく低いね、今見ると。高台でも亡くなったからね。

—高台にも津波が。

来たの。10mを超えたもの。おばあちゃんは車に乗って、私は車から出てみんなと海を見ていたんですよ。ラジオで女川が津波7mというから「じゃあ大丈夫だね」と聞いていたら、あつという間に真っ黒い水が来て全部囲まれちゃって。下のおうちをバリバリのみこむんですよ。若い人は崖を登って山に逃げたけど、私はおばあちゃんを乗せているから逃げようがなくて、そのまま車に乗って流されました。右側が海、左は山で。エンジンはかからないけど、山の方、左にハンドルを切ったら車は左に行ってくれたんです。

—おばあちゃんは一人暮らし？放っておけなかったということでしょうか。

家族はおりましたけど、お仕事でいつもいないんですよ。杖でようやく歩く感じでした。ご近所様で、実家が私と同じ上下堤なのよ。何か親戚みたいな感じで。逃げようと思って、そうだ、おばあちゃんを迎えに行かなければって。すぐに行きましたね。

—そのおばあちゃんを連れていかなかったら、若い人と一緒に行動されたでしょうか。

やっぱり、もう山に登りましたね。

—おばあさんは、車内で、どういう感じでしたか。

流されて車内にどんどん水が入ってきて「大丈夫？」と聞いても、助手席で返事しなくなったの。高台でシイタケを栽培していて、たまたまその大きな木が流れてきたんだね。それが後ろの座席の窓ガラスを壊してくれたの。その時は首の高さまで水が来ていた。もう終わりだなというところで逃げられると思って、おばあちゃんはもう全然動かないし、「ごめんね」と言いながら、自分だけ車を出て、がれき集めて足場にして山を登ったね。

—あたりに、人の気配はなかったですか。

私が流されたところに、1軒、2軒、後ろに3軒ぐらいおうちがあるんですよ。1軒も水が入らなかったの。私も、山で生き延びた人みんな、このおうちに集まったんです。玄関先では近所のおばあちゃんももう虫の息で、助けられず、見ているしかなかったね。

—ひと晩、ほかの人のお宅で。

電気はつかないし、寒いし。夜中、懐中電灯つけると、お家のないところから「助けて」と声がするんですよ。どこかさっぱり、助けられなかった。朝になったら外は全部茶色。消防の人が迎えに来て、自宅まで歩いたら「えっ、おうちがない」。土台だけでした。

—そこから避難所へ。

私は車で浅井公民館に連れて行かれたね、小さいから、あまりの人で中に入れなくて、3日ぐらいつと外でした。たき火して、疲れたら車を借りてちょっと休むぐらい。ようやく荷物用のテントが来たので、荷物を入れないで、外にいた私たちを入れてくれました。

—テントの中だって、寒かったですよ。

公民館の近所の人が布団を全部寄付してくれて、中に敷いて何とかよくなりましたね。テント暮らしが3

日ぐらい続いたら、市役所の人が来て「ここだと凍え死ぬでしょう」って。「今言うかよ」、「もっと早く来いよ」って、みんなで言いながら、違う避難所に連れて行かれたの。西福田の公民館ね、畳、ストーブがある。「すごい、ようやくだね」としゃべっていたら「新町の人はまた移ります」と言われて。次の日、松島町に行ったの。

—志野さんも、その避難所に行ったと言っていました。

うん、来てたね。120人くらい新町の人が集められて。農業関係の施設だったね。

—かんぼの宿にいた娘さんとお孫さんとは、いつお会いできたんですか。

かんぼの宿の人たちは全員助かったと聞いたから、娘たちのことは心配しなかったね。かんぼからヘリコプターで連れて行かれて、私と連絡が取れないというので、娘が捜しに来たんだね。私が浅井に行って3〜4日たってから。松島は一緒に行きましたね。

—感動の再会でしたか。

あまりにいろんなことがありすぎて。感動ではない（笑）。とりあえず「生きたね」みたいな。よかった、よかったという感じ。

—一緒にいたおばあさんはその後どのように。

その後は、消防の人とかにお話して。結構たってから、水が引くようになってから捜してもらって、見つかって。車の中ではなくて車から出ていたそうです。

—精いっぱい、できることをされたと思いますけど。

いやあ、半分後悔。人を助けるって大変というかね。生きてもらったら「ああ、助けてよかった」だけど。助けに行っちゃよかったのかなって。傷になっていますね、気持ちの。

—おばあちゃんが家に残っていたら、間違いなく津波で被災されていますよね。

お家にいた人は全員亡くなったから。その結果を言ってもね。それはそれだから、何か違う助け方があったかな、いまだに思うね。人を助けるって、そう簡単に。何も考えていなくて、迎えに行ったものだから。それで亡くなったから、余計に何か気持ちがね。

—これまでいろんな方が、武田さんのせいじゃないよと言葉を掛けたのでは。

時間がたっても、これだけは。うーん。なんか、助けられなかったというのが、かえって。助けに行っちゃ助けられなかったのが傷なんだね。その思いが何か。今から何かあっても、人を助ける、躊躇するかもしれない。もうひっかかったままだから。

—武田さんだって紙一重、本当に危なかったわけだし。

それはそうだけどね。たまたま助かったけれども。そういう問題でもねえから。

—皆さん、そういうお年寄りを放っておかないじゃないですか。武田さんもごく自然に。

そうですね。それでも、何か安易だったかなという思いがまだにあります。そこだけは。

—5カ月の避難所暮らし。仮設住宅に早く入りたいという気持ちはありましたか。

長かったね。どこに入りたいか、第一希望はどこか、市役所から聞かれたけど、全然当たらないね、何でもだろうって。最後まで残っていたのが4、5軒かな。どこで誰が仮設の抽選しているのかわからないし、いつ当たるのかもわからないし。待つだけだったから。

—ようやく小野駅前仮設住宅に入られて。

8月18日、仮設に入ったの。ようやく。うれしい。人に見られないで生きていられるというか、その思

いだね。すごい、なんかすつきりしたね。

—仮設は約 80 軒、約 350 人が入りましたが、顔見知りは何れぐらいいましたか。

一緒にいた新町の 5 世帯だけ。いろんなところから来ていたね。

—せっかく新町の人たちが避難所でまとまっていたので、仮設もそのままというお考えは。

私はだよ、一緒にねえ方がよかった。今までいた人たちと一緒にだと、全部そのままだし全然新しいこと、変化がないですよ。それだったら知らない人が集まって、また新しくつくった方がいいと思っていたね。みんな、ばらばらでいいと思っていました。

—まとまって移ったほかの地域では、絆が保たれたなんて声も聞くので、新鮮ですね。

私はそう思っていたね。別に何軒か一緒にいいけど、仮設だし、どうせまた、後でお家をつくるんだから、仲良し子よしでなくても、違う風を入れた方がいいという考えでした。

—お年寄りはそのでストレスになる人もいるけど、武田さんはオープンな性格だし…。

そうだね。避難所では私、煙草吸っていたの。煙草を吸うところは人が集まるから、いろんな人としゃべって、みんないい人じゃんと思ったの。それまではお金持ち、貧乏ってお家の落差があったのね。それが一気にお家がなくなったでしょう。みんな平等になったのよ、そこで。そうか、そんな悪い人はいない、みんな同じじゃんと思ったんですよ。

—悪い人たちじゃないなら、なおのこと、もとからの知り合いで仮設という考えは。

でも、やっぱり落差ができてくるのよ。もめたこともあったし、やっぱり壊した方がいいじゃん、みたいな。

—部屋が集会所の前で、早朝から掃除をしていました。いろいろなことが見えたのでは

たまたまだね。いることで見えてきて、もめごとがあったら、仮設によく来ていたお巡りさんを使って、言ってもらったり、頼んだりしていた。私は表に出なかったね。

—自治会長になるいきさつを。

9 月ごろまでは、市で人を雇って集会所を管理していたんですね。使うのに、いちいち何に使うから何時から何時までと書くので「おかしいでしょう、集会所を自由に使えないって」と市に電話したの。「お金も何も要りません。掃除も全部こっちでしますので、鍵を貸してください」と言ったら市が「分かりました」となって、そこから管理するようになりました。どさくさに紛れて 9 月か 10 月ごろ、自治会長になった感じですね。

—自治会長になって、仮設をこうしたいとか展望はありましたか。

考えてません。仮設がまとまったのは徳島からももらった野菜のおかげだよ。野菜を集会所の前で広げて、通る人、暇そうにしている人みんなに「手伝って」と声を掛けたんだね。仕分けの作業をして、「毎週だね」と言いながら、知らない人とも友達になって。仮設の人全員に渡るようにキュウリの 1 本でも、ジャガイモ 1 個でもいいから配ってもらって、手伝ってもらった人は少し多めにあげて。そういうことを最初にしてたね。

—徳島の方は、何で小野駅前仮設に？

徳島市役所の職員だったかな、ご夫婦が松島の避難所に来たんですよ。「手伝うことありませんか」、「ほしい物ありませんか」と尋ねたら、区長さんが「要りません」と断ったんだけど、たまたま私が入って「あります、あります」、「ほしいです。野菜がないんです」と話して。「じゃあ野菜を送るね」となって。仮設に週 1 で、5 年ぐらい続きましたね。

—集会所を使えるようになって、おのくんが始まるまでを。

管理していた人たちが集会所を出て、自分たちで集まっていたら「3日もするとお茶飲みも飽きるよね」という話になったんですね。暇なんで何かつくろうとなって最初、変ちくりんなものをつくっていたんです。カエルの形をした、置物にもならない、わけのわからないもの。翌年に、埼玉の人が仮設の知り合いの子どもさんにプレゼントを贈ってくれて、靴下でつくったソックモンキーでした。親御さんたちが「これ、つくれるんじゃない」と話してくれて、「あ、いけるね」ってなって。電話番号を教えてもらって、すぐに埼玉のその人に電話したの。「すみません、お金がないので、自力で指導に来てください」とお願いして。来てくれたのが2012年の4月20日。それからおのくんを始めました。

—集会所で、することがなかったんですね。

私が無週1回は野菜を仕分けするので、みんなその時に来るでしょう。ついでに、暇だからお茶飲みしたんです。来られる人は毎日来ておしゃべりするのだけれども、やっぱり3日もすると飽きるんですね、お茶飲みは。もう何もなくて。

—仮設ではお茶つこが大切なんてよく言いましたけど、3日続くと駄目ですか。

はい、駄目です。やっぱり、ただお茶を飲むだけは飽きます。いくら何でも。

—初期のころ武田さんは、男性が集会所の管理人だと話は2時間も持たない、女性は夕方までおしゃべりできると話してくれましたが、今の話では「3日で飽きてしまう」と。

飽きるんですよ。飽きて「飽きたね、どうしようか」みたいな話になっていくんですよ。

—12年4月20日からの流れを。

みんなに声をかけて20人ぐらい集まったかな、4月20日は。先生に教わって、つくり始めましたね。好き嫌いもあるし、残ったのが今いる人たちでね。とりあえず売ろうという頭はあったけども、売れるとも考えていなかったね。みんな暇だからいっぱいくるのよ。だから、つくりすぎはやめましょう、30個になったら、やめてお茶飲みしましょう、それ以上はつくらないことにしたんだね。そのうち、クリスマスとか、ボランティアの人たちが結構買いに来てくれて、急に忙しくなって、間に合わなくなってきた。ズンズンズンズンやったけど、(買えるまで)1年待ちみたいなことになっていったんだね。

—おのくん一つ、値段は1,000円でした。

自分たちで話して「これ、1,000円ぐらいだね。細かいとお金の計算がめんどうくしえから1,000円にしよう」みたいな、それだけ。2,000円の場合はなかったね、やっぱり1,000円だね、せいぜい。最初はもらった靴下がほとんど。綿とかの材料は100均で全部買って。みんなに最初の3カ月ぐらいは、お金なしでやってもらっていたね。続くとも思っていないし、赤字になったらやめましょうみたいな感覚だった。

—1,000円の内訳は。利益はほとんど…。

ないです。靴下が高いと赤字。内訳はみんなに払う報酬と材料費。糸から何から。(作り手さんは)つくらないともらえない。歩合制。働いた時間じゃなくて1個いくらだから。

—作り手さんにお金を渡したら、どんな反応が。

「わっ、こんなにもらえたの。もっと頑張る」って。「やめて、そんな、売れないんだから、そんなつくらなくていいから」とかそんな会話をしたね。

—お金もらえるから、もっと頑張っちゃうというのはありますよね。

人だからね、やっぱりね。苦手でも、お金見ると頑張るんだよね。それだけじゃなくて、品質も考えてね、慌てなくていいからって言ったね。できる範囲でしか販売しないから、買いたい人は待たせていればいいんだよって。こっちは品質を見ながら、自分たちのできることを、そんな無理してやることはないという考えでしたね。

—品質にはこだわって。

そうだね。見ていると、やっぱりしんどいものもあるのよ。最初なんて、直しをさせるのもかわいそうと思うから。でも、言いたいことはちゃんと言うね。みんなが聞こうが聞くまいが、みんなもう慣れたから「はいはい」みたいな感じで聞いているけどね。

—買ってくださる人への礼儀とか、そんな感じですか。

礼儀とかじゃなく、自分がつくっているものの品質が悪かったら嫌でしょうという感じ。お客さんの中には、わざと変ちくりんなものを選ぶ人がいるのよ。それは何とも言えない。お客さんは好みがあるから。ただ、自分は「比べたらおかしいでしょう」って。自分に対してだね。今は私が言う前に、これはおかしいとか、みんなで注意し合っていますね。

—仮設がある土地の地名が小野。「おのくん」という名前はインパクトがありました。

私がかわいい名前が嫌いだから。それで、おのくんにしたの。「おのちゃん」だとお行儀いいし「おのさん」も話は出たのよ。「嫌だ、それ」って。「おのくん」なら、それいいって、3分ぐらいで決まった話だから。これは、もう私も絶妙だと思います。

—「めんどくしえ」というワードも外せないですね。

あの時は、みんな、つくりながら「めんどくしえ、めんどくしえ」って、あまりにも連発しすぎたね。1針1針縫うのが。しばらく針仕事なんてやっていないものだから、めんどくさかったからね。「めんどくしえ、これ」って、毎日連発していましたね。

—それが、「おのくん」のとぼけた顔とすごく。

一致した（笑）？NHKアナウンサーの小野文恵さんがここに来て、みんなぶつぶつ言って作業しているから初めに「めんどくしえ人形」って命名してくれたね。

—お住まいの再建でも、考えるのが「めんどくしえ」とおっしゃっていました。

そう（笑）。あまり深く追求しない。めんどくさい。

—あそこ各地の仮設は支援者も入って、ミサガをつくる女性も多かった。

暇だけど、同じものはやりたくなかったね。誰かが先にやっているものをやりたくないし、せっかく一生懸命つくっているのに、こっちでもやったら、あれでしょう。みんなと違うものをやりたかったんだよ。何でもいいんだけど、ミサガをほかでつくっていなかったら、こっちでやってもよかったけどね。ほかの仮設でこんなことやっているとか聞いていたから、じゃあそれは省いて、やってないこと何かあればいいねって。

—モンキーはなかったわけですね。

なかったですね。私たちがやったら、みんな、まねするようになったけどね。

—ホームページで、にせ物注意の扱いが目立ちますけど、それぐらい多いですか。

多いです。勝手に。タグがついていないとお客さんが「ついていないけど」って電話を寄越すんだね。「どこから買いましたか」と聞いたら、違うところなので「にせ物ですね」と説明します。「ほしかったら、いいよ、つけてあげるよ」と言うけどね。

—武田さんはもともと内職の仕事でしたが、ほかの作り手さんは震災前どんなお仕事を。

農家の人が多かった。みんな年齢がいつているから、勤めに出ている人も少なかった。

—作り手さんの年齢層はどれぐらいでしたか。

皆さんあるとき、50、60ぐらい。40代もいたか。私が一番上でいま71になりました。

—作業の中で、武田さんは、どんな役割を。

私は、手作業の部分はしない。ミシンで縫う最初の作業をします。ほかの人がしていたけど経費がもつたないから、自分でやるようになりました。4時に起きてミシンに向かう。靴下を、ミシンでパーツの下縫いをしてから、このパーツはこの人に縫ってもらおうと皆さんの袋に入れます。それで綿を詰めて、手作業で縫い合わせて、目を付けて。

—睡眠時間も少ないでしょう。

昼寝するから大丈夫だ。私は忙しくないよ、駄目。眠れないんだよ。

—集会所で作り手さん、あまり話もせず集中して作業を。

うそだよ（笑）。それはうそ。言いすぎ。来た人の話、みんな聞いてんだよ。耳、ダンボにしています。あとでおしゃべりするときの、えさになるんです。

—この作業は、男性じゃ多分続かないかも。

無理でしょうね、男性は。女の人は、おしゃべり場が欲しいんだよ。おばちゃんは特に。しゃべれる場がほしいですよ。話題は何でもいいですよ、それこそ。

—作り手さんの女性、「おのくん」に関わって、人生に何か変化はありましたか。

そうだねえ、年齢いって働くところもないから、お金もらえるのはあるよね。それと、お客さんと対話できるのがやっぱりうれしいみたいです、みんな。その人それぞれにファンがいるから。お客さんから「あの人はいるのか」と聞かれると喜んでるね。

—作り手さんそれぞれにファンがいる？

そう。ファンがいるんですよ。それぞれに。お客さんが1~2回こちらに来て、気が合って、いろいろしゃべって。そうすると、次は「誰々さん、いつ出番ですか」と言うの。

—指名ですか。

はい、指名で来ます。その人がつくったおのくんがほしいというより、その人に会いに来るみたいな。「おのくん」はどれでもいいよ。そんな感じですね。

—作り手さんのご家族も応援して。

やっぱりお金を稼ぐというのが大事なんですね。お家にいながらできるというのが。だから家族が反対する人はいなかったね。応援してくれることはあるけれども。こんなに続いているから「私もやればよかった」と言う人がいるぐらいです。

—11人の作り手さん、仮設を出た行き先は。

石巻が1人、それ以外は東松島。私は18年10月、最後に仮設を出て牛網に再建しました。災害公営住宅は高く入れないもの。野蒜の高台も3人いるね。みんな再建だね。

—集会所が18年になりました。今は、この空の駅と自宅で作業ですか。

お店が当番制だからその時はお店で作業して、あとはおうちでやってもらっていますね。

—作り手の皆さん、仮設からばらばらになって集まる機会は減りましたか。

ばらばらという感覚もないけどね、毎度会うから。近くだから、何かあったらみんな集まるし。きょうはあの人が出番だから、やっていくかなんて、勝手に集まっていますね。

—コロナ禍の影響は。集まる機会が減りましたか。

いや、普通に。集まらなきゃいけないときは、みんな集めます。まあ、集めるのは暖かい日で、外でやっ

ていますよ、いつも。部屋の中じゃなくて。つくったものを持ってきたり、結構毎日行ったり来たりするし、いつも会えるから、一緒にいる感じがな。

—作業を一緒に続けてきて、皆さん、一体感はありますか。

それは何か信頼というか、そっちなね。だから、お互いに言いたいことは言う。それで駄目だったら、辞めなさいとまで言うよ。でも、誰も辞める人はいないね、今さら。

—おのくんを手にした里親さんは26万人だそうですね。海外もたくさん。

ハワイ、オーストラリアはここに来たね。台湾の人たちは、靴下も送ってくれたね。

—里親さんが集会所に行くとき「里帰り」と呼んで、参加型のうまい仕組みでした。

里親制度をつくったのはボランティアじゃないかな。みんなで集まった時に「里親だよ、これって」って感じで。全国にイベントに行くと、現地の里親さんが手伝いに来てくれるんだよ。ネットワークができてから。

—里親26万人、ここからおのくんを発送した分と直接購入した人の割合は。

3分の1、5分の1ぐらいは発送ですかね。今はコロナで多いけど、発送は少ないね。

—大半が対面で購入した里親さんなんですね。集会所に直接来てもらうことを大事にしていました。

東松島に来てほしいというのはあったね。来れば「おのくん」を里子にしなくても、ジュースを買ったり、少しはお金がおちるでしょうと考えましたね。1人でも来てほしいということだね。東松島といっても、来る用事もないだろうし、何かで呼びたいということだね。

—話が大きい。東松島に来てほしいなんて、市長さんみたいなことを。

そうね。市長みたいだ(笑)。仮設だけでなく、いろんなところを見てほしかったね。そんなに見るところもないんだけどさ。皆さん、東松山とよく間違うんですよ。すごい気になって、だったら東松島に来てよと思ったね。

—05年の合併でできた東松島という名前が武田さんの中で定着したのはいつぐらいですか。

そうそうそう。(旧)矢本(町)とこっち(旧鳴瀬町)で分かれていたからね。震災のころから東松島はなじんできたかな。そういう意味で、「おのくん」をやる場所は、矢本じゃなく絶対こっちの鳴瀬側でやろうというのはあったね、間違いなく。

—コロナになって、空の駅を訪れる人は減りましたか。来る人はどこからですか。

減りました、はい。3分の1になったという感じ。県外が多いね。名古屋、埼玉、千葉…。里親さんもあるけど、初めての人が多いね。何で知るんだろう。ネットかな。

—空の駅、今後の展望を。

やっぱり「おのくん」だけだと弱くなってきた。いろいろオリジナルの「おのくん」もできたけど、お人形だし、飽きるから。だから食べ物も出して、来てくれたらいいなという気持ちだね。今はのんびりしているけどね。食べ物を出すようになったら、もう、めちゃ忙しくなります。楽しみです。とりあえず、のりうどんを考えているから。この中は使わないで、外で食べる。この建物でまたコミュニティの復活というか、里親さんに帰ってきてもらって、またワイワイしゃべりながら、食べるなりしたいね。

—空の駅の最終形は、本設の建物ですか、こういう仮設のままですか。

立派な建物はほしくない。仮設でいきます。それが壊れたら、また仮設を置くとか。前は近代的な建物を建てようという話だったけど、「そんなにもうかってんだ」って、あまりいい感じは受けないみたいね。仮設の方が気楽で。建てるお金もないしね(笑)。

—振り回されたことも含めて、これまでいろいろな支援の人が来たでしょう。

そういう人は勝手にやって離れていくし、本当に手伝いたい人はそのままいるし。その時はその時で助かったこともあるし。だから、やっぱり感謝だね。こんなところに来て、皆さん、応援してくれて。私のない知恵を、一生懸命知恵を使って手伝ってくれたので。来てくれたこと自体が感謝ですよ。わざわざ。ありがたかったですね。

—武田さんはあのこと「ボランティアって、結局婚活だよ」と、おっしゃっていました。

言ったな。それでも、その時には本当のことだからね。

—来る人を拒まなかった。

拒まないね。拒む必要がない。

—もともと、人と話すのは好きでしたか。

いやいや。人と話すのは面倒くさいから嫌だった（笑）。野蒜では4、5軒の人しか知らなかったもの。付き合いがあって行くのは1軒か2軒ぐらいで、ほとんど出なかったもの。

—じゃあ、性格が変わった？

変わったね。変わりました。180度、変わりました、性格。

—きっかけは何でしょう。

印象的なのは避難所でね、すごいみんないい人と思ったあたりからだね。悪い人ではないから、自分の意見としてこういうのを出そうとか。そこら辺から変わってきたね。いろんな人が来たけど（対応は）私がやったし、そこら辺からだね。

—支援者もいろいろいたけど、悪い人じゃないからウエルカム。

そういうこと。みんな、わざわざ来てくれるので最初びっくりしたね。ボランティアのことは分からなかったから、驚きだったね。えっ、何で。市とか会社からお金をもらって来るのは分かるけど、何で自分のお金で来るの、それでびっくりしました。

—武田さんがオープンだから、みんなオープンになるのでは。

普通だよ。だって、わざわざ来てくれたんだもの。「ありがとう」でしょう。来てくれたんだから、何かお返ししたいさ。せめて、お茶ぐらい飲みなよみたいな。ただそれだけ。

—でも、そんなに構う感じでもなく。

構わないよ。しゃべってもらって夕飯でも食べさせてやろうとか、そんな頭しかないの。

—お世話好きなところ、昔からあったのでは。

なかったよ、震災前は。面倒臭いから。でも、近所のおばあちゃんたちを集めていたかな。私が仕事をしていて、おばあちゃんたちが勝手にうちに来て、私がお茶とお茶菓子を用意して置いておくと、おばあちゃんたちが自分のお客さんを連れて、お茶を飲んで、茶碗を洗って、帰っていく流れをつくったね。私は手を出さなくて勝手にしゃべっていた。

—里親になってくださった人、これから里親になる人にメッセージを。

感謝の気持ち、本当、ありがとうだね。皆さんに応援していただいて、ここまで来られましたという一言だね。遊びに来てくれたら、うれしいし、1回でなく、また来てほしい。

めんどくしえけど挑戦することと応援することの大切さを伝えていけたらいいな、なんて思ってます（笑）。

4. 3.11 メモリアルネットワーク 中川政治さん

宮城県石巻市の日和山から見下ろせる南浜・門脇地区は東日本大震災当時、約 4500 人が暮らしていたが、津波と火災で多くの命が奪われ、まちなみが一変した。国や県はこの地一帯を「石巻南浜津波復興祈念公園」とし、中核の「みやぎ東日本大震災津波伝承館」が 2021 年 6 月にオープンした。その 3 カ月前、この施設に向き合う形で民間の伝承交流施設「MEET 門脇」がオープン。運営する公益社団法人 3.11 みらいサポートの専務理事中川政治さんは 2011 年の震災直後から石巻入りし、前身体団の石巻災害復興支援協議会の設立に関わった。協議会を巡ってはトラブルもあったが、現在は伝承・継承に力を入れ、東北全体の伝承活動を支えようと「3.11 メモリアルネットワーク」の事務局も務める。石巻で活動を続け、自前の施設も建てた思いを 22 年 1 月 22 日、熱く語っていただいた。



写真 9 事務所の窓から遺構の門脇小学校



写真 10 インタビュー模様

—京都のご出身でしたね。

阪神・淡路大震災のとき高校 3 年で、センター試験の直後でした。何をしたらいいかも分からなかったです。京都は何もなかったですけど同級生が被災したり、家具に挟まれたりしました。ボランティアの選択肢すら思いつかなくて、受験勉強、2 次試験を受けたわけですね。会社で営業して 3 年で辞めて、国際協力 NGO の NICCO（日本国際民間協力会）で現地事務所長として、ヨルダンに 2 年、2010 年に地震があったハイチに 3 カ月いました。

—会社の営業から転身を。

オウム真理教の事件が阪神・淡路大震災の後に起きました。一流大学を出た人がサリンをつくり、今自分は何のために勉強しているんだろうって。誤解を招く表現かもしれないですけど、僕もこうなるかもしれないと思ったんですよ。受験勉強しか知らないと、いつのまにか、誰かをだます、誰かを害することに一生懸命になりかねない。こうじゃない生き方をしないとまずいと思ったというのはあります。氷河期世代で就職は大変でした。どこを受けても落とされて、仕事で大変だ、お金をもらうにはそれなりのことをしなきゃみたいな考えがありました。就職したメーカーで上司に「残業させてください」と言ったら「1 時間残業したら千何百円、3 時間残業したら 5,000 円、おまえが 3 時間残って 5,000 円利益を生み出せるなら、幾らでも残れ」と言われて「なるほどな」と当時は納得したんですね。企業は利益を出すから続けられる仕事。でも、違う仕事があってもいいなと。石の上にも 3 年と言うし、いきなりやめて迷惑かけるのも嫌だったので、会社入って 2 年後に「1 年後にやめます」と言いました。やめた後は、ボランティアしたり、アフリカ

に行ったり、2年ぐらいふらふらしていました。ダイビングインストラクターをして、夏は京都の園部で農家を手伝って、NICCOに入りました。

—NICCO は京都の団体ですね。

地元だし、国際協力はやりがいありそうだなって。メーカーはユーザーの「ありがとう」が遠いけど、国際協力は相手が目の前じゃないですか。ハイチは銃社会なので緊張感が大きくて、スタッフの安全を確保しないとイケないし、あまり人に話したことないですけど、支援物資の取り合いを招いてしまったこともあって、しんどい現場でした。物資を国境で通そうにも「賄賂を2割か3割寄越したら通してやる」と言われて違う紹介者を探したりして、調整が大変でした。感染症のリスクもあったし、石巻で保健師さんが「こんな非衛生的な環境は途上国でもありません」と会議で言っても、ハイチと比べて「いやいや、これでも日本はめっちゃ良いから」と思っていました。

—NICCO さんをやめて、その後は。

ハイチを激務でやめて、さすがにずっと休憩しているのもなと思って、青年海外協力隊でフィジーに。コンポストをつくる半年の事業で、任期は2011年6月まででした。3月11日に中間のプレゼンをしたら「津波が何時間後に数十cm来るらしいから、海岸には近づくな」と緊急連絡がきたんです。インターネットで日本の津波の映像を見ました。阪神淡路では何をしたらいいかわからなかったけど、できることがあると思って「帰らせてください」と言いました。任期途中で「不適合者」のような形で帰国させる制度があって「それでしか帰れませんよ」と言うので「全然大丈夫です」。「国際協力の求人サイトも3年間載せられなくなりますよ」と告げられても「構わないです」と言って帰ってきました。

—何で石巻へ。

実家に帰って、京都のJC（青年会議所）さんが東北に送る物資（飲料や保存食、石けんや歯ブラシなどの生活用品）の仕分けをしました。行き先は仙台と石巻のJCでした。「被災された方に届くまでやりたい、そこが大事だと思うので、車を調達して行きますね」と言って、トラックとは別便で勝手について行きました。車さえあれば寝泊まりできるから、ガソリンより入手しやすかった軽油の車を探して情報収集と発信ができるようにパソコン、モバイル Wi-Fi を購入して持って行きました。事務仕事をするつもりでした。石巻に入ったのは3月29日ですね。JCの人から「京都から変な人が行くけど、JCで面倒見てあげて」と言ってもらって配布に同行して、2日目には「いろいろな人が石巻専修大に集まって連絡会をしているから、行ってみたら」と言われて、連絡会を手伝うことになりました。

—当時、ボランティアが入るのはまだ早いという時期尚早論もありました。

支援が早ければ早いほど、助けられる人が多くなると思っていました。でも、帰るのに手続きで2週間以上かかったんですね。並行して、日本ではボランティアに行くなと言っている。そんなばかな話があるか、絶対やることあるのに、と思っていました。

—3月ぐらいは時期尚早論が幅をきかせていました。

そんなのは耳に入っていませんでした。家族からは「何しに行くの?」とか「東北にわざわざ放射能を浴びに行くのか」と言われて、100万人単位で暮らしている東北の人たちにそれ言うか、おかしいだろうと思っていました。石巻で、渡波とか満潮時に冠水する地域で物資を配ったとき、「うちはいいいから、よそを助けてあげて」と言われたんです。僕からすると、その方もすごい大変なのにそういう人がいることも、衝撃でしたね。

—最初の1年で石巻に来た28万人のうち12万人が一般ボランティアで、残りの16万人は組織に属する人たちだと調査結果を出しました。災害ボランティアセンターの人数を基準に東日本大震災の支援が神戸より少ないという思い込みに一石を投じました。

ボランティアをしたい個人が週末に来て「泥出し、やった」と帰っていく。だけど、被災地にいると、中川宅の泥出しやったら、隣の家もやらなきゃならない。「じゃあ、ここの地区、任せて」というNPOが出て

くるわけです。終わるまでやめない、ずっといる人たちが生まれたのは大きいですね。それを支える人、事務仕事、サイト運営、調整はすごく必要でした。炊き出しをしたいという各地からの電話が鳴りっ放しで、何月何日に200食のラーメンできます、300食の豚汁できます、どこでやったらいいかというので、アクセスを教えてあげて、ようやく電話を切ったら留守電が3つ入っている感じですよ。そんなこと、スコップ担いでくるボランティアは考えない。でも、それだけの人数が動くなら、事務仕事って要るんですよね。それをNPOがやれるようになった意味は大きいです。

—支援者の人数、動向を丹念に調査していましたね。

阪神・淡路大震災で兵庫県は、2万人×31日=62万人、という粗い推計をしていて、あとから電話で主だった団体に聞いて「1日どれぐらい動いてました」という数字を出したようですが、どうでしょう。土日と平日で同じ人数のわけがない。ボランティアセンターがない時代にここまでやれただけでもすごいけど、数字の一人歩きは怖い。東日本大震災でも、復興庁が「被災地内外で700万人以上のボランティアが活躍」と公表しましたが、全国で送り出しをした人や、東京でボランティアの調整をした人も入った「盛った」数字です。根拠は、社会福祉協議会に設置された災害ボラセンの登録数と、赤い羽根などの資金経由で動いた人です。送る側で活動予定の人数を申請時に「500人行かせます」と書いて、被災地のボラセンでも「500人活動した」となって二重カウントの可能性がある。吹かした数にすると、次の世代に申し訳ない。この数字がまた次の災害で比較に使われる。東北の現場で頑張った人を、おとしめていることを想像してほしいですよ。

—東北は、宿の確保、交通手段等、阪神・淡路とは違う困難がありました。

そうですね、神戸は大阪から通えたり、東北で泊まるのは大変でした。僕らが東北で分かっていたいなかったのは、家族や親戚、個人の助け合いが多かったことです。内陸なら米や野菜はあったし「ボランティアセンターなんか知らん、親戚だけで泥かきした」という人が多い。企業の力も僕たちは把握できていない。日本製紙さんの系列企業だけで毎日何百人動いていた、企業は百人単位なので、人数にすると大きいですよ。

—団体としての活動は、「NPO・NGO連絡会」の事務局機能から始まり、2011年5月に前身の石巻災害復興支援協議会の設立。12年11月には「みらいサポート石巻」、15年7月に公益社団法人となり、19年4月に「3.11 みらいサポート」に。

名前が2回も、公益も入れると3回も変わっているんですね。初めは行政と社協との3者連携を石巻災害復興支援協議会でやっていました。次の名前はスタッフみんなですごく考えました。もらうものをどうしようという時期でもないから「災害復興支援」という名前も違う。復興応援隊の事業が取れたのと合わせて、未来を支える、地域のリーダーや、まちづくり・コミュニティづくりをしている人たち、仮設住宅のじちれんさん、語り部さんたちを支えようと、下支えに変わりましたね。

今は伝承活動のサポート対象が東北に広がったので団体名から石巻を外しました。ミッションは「つなぐ3.11の学びを生きる力に」。たくさんの方が亡くなったあの出来事を今の人、ほかの地域につないで、生きる力にしようというものです。岩手、宮城、福島の3県や全国の拠点施設、団体、個人による「3.11メモリアルネットワーク」の事務局もしています。ミッションとして変わらないのは、何かをつないでいくこと、地域の方が主体ということです。阪神淡路以降、自分がやりたいからやるのがボランティアの基本と聞いていましたけど、違和感もあるんですね。私がやりたいからとやってみて、地域に迷惑になることもありました。この間、うちでは、がれき詐欺事件の問題が起こったので、そもそも我々の活動は要るのか？から話し合っって「やるならこの方向だよ」となって、名前を変えて走り始めた。事件の影響は今も続いています。事業の委託とか、10年たっても。

—この事件、協議会にいた中川さんは、とばっちりを受けた立場のような…。

ある意味ではそうですね。週刊誌から取材の電話があって「わけわからん」と。何も知らなかったんですよ。聞けば、写真を使って、写真がなくても、ダンプを何台使ったとか、報告の紙さえ出せば車両の台数に応じてお金を払うみたいなことだったらしくて、それはいかんわなど。T建設ではなく復興支援協議会

会長として取り上げられる記事が続きましたけど、うちに直接取材に来たのは「石巻日日新聞」だけです。僕は外から来ているから、まだいいですよ。だけど、今もいる地元のスタッフは「あなたの勤めているところ、詐欺だって」みたいに言われて、すごく厳しいですよ。そんな中で、みんなやってくれました。

—いろんな人や物が、石巻に押し寄せた混乱の中で生じた事件という印象があります。

その意味で、僕が当時の復興支援協議会としてできなかったことといえば、利益相反契約ということを知らなくて、復興支援協議会側からT建設側に振り込むことをほかの理事と決議して、それも良しと議決しなかったことぐらいです。利益相反契約には注意した方がいいと知っていれば何か変えられたとは思いますが。協議会の私から、建設会社の私への委託とか、地権者としての私、不動産屋としての私がいるから何かできるといったことは、今後の災害でも出ますよ。災害対応って、ちょっとはみ出さざるを得ないんです。ストッパーがきくようにしないといけないけど、無理しないと実現できないこともあって、どうしていくかは課題ですね。

—大混乱している中で、厳密に区別できるのかどうかですね。

こちらからは申請していないのに、復興支援協議会に5,000万円が振り込まれ、特殊車両のオペレータを雇うのはT建設だからというので、T建設に支払われた。でも普通は、地方都市の建設業者にいきなり5,000万はないですよ。むちゃなことが起きる。NGO・NPO側でも「2,000万、いいじゃない？ 漁船、買おうぜ」とやっていた。そういう身の丈に合わないお金を受け止める力が足りなかったと思います。ただ「脇が甘い」と後から言うのは簡単だけど、あの時は前例のないことばかりで、現場のためにやる人がリスクも込みで始めるしかない、みたいな部分はありましたね。

でも、会長本人が裁判などでもっと説明して、お金を返せばいろいろなことがもっと回復できた。僕がもし関わっていたら「返すものは返す、謝るところは謝りましょう」と言ったと思いますけど、本人が否認を続けているし、全然そういうことはしないので、関わらないことにしました。「あの人は別の人」としないと、みらいサポートを守れなかった。自分を守らざるを得なかったのかもしれないけど、彼は「私はこうで駄目だったけど、ボランティアさんはすごくやってくれた」と言わないといけない立場でした。私自身もちゃんとできなかった部分はあるし、あの事件が日本をよくする力を損ねてしまった。神戸はボランティア元年というけど、東北はボランティアへの言及が少ないです。

—東北の住民さんは、支援・ボランティアに感謝している人ばかりですよ。

そう言ってくれると……。でも、行政が全然思っていないと思う。見えてないというのものもあるし。石巻で当時、我々や自衛隊さんとやりとりがあった市の職員は「ボランティアと自衛隊がなかったら石巻はなかった」と言ってくれますけど、ごく一部です。「ボランティアがいたせいで大変だった」と言う人もいるし、阪神淡路とだいぶ違います。

—中川さんはボランティアやNPOに希望を感じていたわけですね。

まあそうですね。(がれきが消えた被災地の写真を見せて) 見通す限りきれいですが、たった2日でこうなったんですよ。関わった人たちは「日本が変わる」と思った。若い世代が、お金のためでもなく、初めて知り合った人たちと力を合わせて、目に見える変化を起こせる、人のためにこれだけできると感じられた。僕たちは未来を暗く感じる世代ですけど、「こんなに底力がある、やれることがあるんだ」と感じられた場所なんですよ。いろいろつながりが生まれて、毎日が奇跡の連続みたいな感じでした。

それを、この事件でつぶしてしまったというのもあります。だから僕が何かしらの回復を義務として感じているのはありますね、報告の冊子をつくったこともそうだし、あんなにやってくれたボランティアが詐欺の人としてひっくるめて見られかねなかった。それはない、と思って、4月から給料ゼロで調査し、報告をしました。JPF(ジャパンプラットフォーム)の職員にしてもらっていましたが、事件が発覚して、JPFに迷惑がかかるかもしれないので、やめさせてくださいと言って、無給でしたね。

—事業の対象が伝承に移っていきました。

2011年から語り部事業は始まっています。活動している重機ボランティアに「ここ、実はこんな場所ですね」

と話したのが、うちの語り部の始まりでした。秋ぐらいから本格的に旅行会社から依頼があり、活動がスタートしました。僕はよそから来ているから、もともと地域にあった事業を浸食するつもりはなかった。だけど、東日本大震災を伝える仕事はしないとけないし、手伝っても地元の人たちにダメージはないと思って始めたんです。

—地元の人から3.11の話を知りたいという外部者のニーズはありましたか。

11年は、目の前にある災害廃棄物を見て「どういうことなの？」と解説を求める人がいっぱいいたわけです。これは大変だにプラスして、元はどうだったのという説明をセットでほしがった。泥かきする場所で「何が起きた」という話を聞く。だから、各地でお話しする語り部が同時多発的に始まったと思います。「うちはこうだね」みたいな話を、お金のためでもなく、しゃべらざるを得なかったことも含めて、語り部活動が定着した。東日本大震災が生んだ社会運動、社会的な取り組みだと勝手に位置づけています。

訪れる人からすれば、ただ被災地に行くだけでは良心の呵責もあって、自分を納得させるために地元の人のお話を聞けるなら行こうとなったかもしれない。1年目までは、目の前に被災した光景があって、それに合わせた説明を求める感じはありました。でも語り部活動は2013年がピークなんです。1年、2年たつて、語りを聞くことはある意味、飽きられて、目の前に何もなくなり、口だけで伝えるのは厳しくなったのかもしれない。なので、ピフォー・アフターを見せよう（見学者がその場でスマホをかざせばかつての被害が分かる）アプリをつくって。目の前、実は車が積み重なっていたとか、違いを見せることに意味があると考えました。定点観測は東北では少なく、阪神淡路の後に写真を撮り続けた人がいて、その前後写真をアプリに使用しているタイミングだったので、まねをさせてもらった。神戸に縁がなかったらできなかつたかもしれません。

—多くの児童が犠牲になった大川小のご遺族による大川伝承の会の事務局も担当されて。

交流人口増加を目指す団体「石巻ビジターズ産業ネットワーク」の震災伝承部会長をして、みんなで話し合っていましたけど、初め、大川の関係者はハードルが高すぎて声をかけられなかった。雄勝花物語の徳水先生に（ご遺族の）佐藤敏郎さんを紹介してもらって、話し合いに入ってもらえるようになりました。事務局は2017年3月ぐらいからですね。

（名取市閉上で津波により息子を失った）丹野祐子さんから「中川さんは外の人だけど、半分ぐらいは血が通っているから」と言われました。僕はご遺族の方にとってそういう存在で、そういう人間として見てもらうのに5、6年かかった。外から来て、家族や家をなくしたわけでもない人間が、伝承をやっている。「あいつはよそ者だけど、一応話をしているやつだ」となるのに、時間も努力も必要だったという気はします。

—努力、どう心がけましたか。

震災直後と同じですよ。やると言ったからにはやりきるしかない。よそから来たボランティアなんて得体が知れないじゃないですか。そんな人たちが地域に入って「やらせてください、やります」と言ったらやるしかないです。中川が「伝承、やります」と言ったら、やり続けるしかない。勉強会に足しげく参加したり、発信を続けたり、ちょっとずつ「あ、この人、話が分かる」と思ってもらえるようになっていくしかなかった。

—3.11 みらいサポート代表理事で大川小遺族の鈴木典行さんは、3.11 メモリアルネットワークの代表も務めていました。

ビジターズ産業ネットワークが終わるので今後を話し合ったときに「もう石巻だけの話じゃない」となって3.11 メモリアルネットワークが立ち上がりました。佐藤敏郎さんは「若い世代が繋がったことだけでも意味があり、自分たちがいなくなった後も、次世代に伝わっているようにすることも大人の責任、社会の責任だ」と言ったんです。代表を決めるのに、「投票でいいんじゃない？」と言った典行さんが一番多い結果でした。代表を「引き受けてもいいよ」という人がいたのは大きかったし、典行さんや敏郎さんのように、裁判の原告団ではなくても、大川のことを一緒に話せる人がいたのは大きかったですね。

—団体名「みらいサポート石巻」から「石巻」を取りました。

メモリアルネットワークの事務局をするのと同時に、メモリアルネットワーク基金を立ち上げて、助成金を岩手や福島にも出すので「石巻ではおかしいね」となりました。「こんなに名前を変えて、ふらふらして恥づかしい」と言う人もいますが、変化に対応してきた結果だと思っています。

—MEET 門脇の目の前には、国と宮城県が共同運営する「みやぎ東日本大震災津波伝承館」が開館しました。宮城県議会やさまざまな人が改善を求めています。

結局住民との話し合いがなかったという話になるんですけど、後悔ですよ。世間の期待は、こういう施設や展示ではなかったと思うんです。阪神・淡路大震災でできた「人と防災未来センター」プラス何か、深い学びができる施設にはならなかった。

国が箱を設計、展示が県という分担でした。「宇宙的スケール」で屋内から日和山が見えるようにという案は日和山が見えて何になるのか、住民さんには分からなかった。VIP用のエントランスは図面にあったけど、ボランティアの説明スペースは屋外だし、語り部さんが屋内で話すことは想定されていなかったの、初期のプランに僕は「あまりにもひどくないですか」と言いました。県のコンセプトペーパーの展示も、記憶シアター「かなしみをこえて」が「悲しみなんかこえられるわけない」という遺族の意見を受けて「かなしみ」から「被災」になったために、共感を生むパートが成立しなくなりました。当初のキーコンセプトだった、追悼や感謝の展示もないです。根っこがないので「何か伝わらないな」と訪問者が思うのは当たり前で、何をしたいのか整理されていない場所なんですよ。

—その県で最も犠牲者が多かった自治体に鎮魂の施設をつくる、それで宮城県では石巻が選ばれた経緯があります。

オープン前の住民説明会で、佐藤敏郎さんが「ここは追悼の場がいいですか」と質問したら、国、県、市、誰も答えられなかった。当然ながら、基本計画に、追悼・鎮魂を第一とする場だと書いてあるのに、とても残念でした。鈴木典行さんが「防災学習はどうするんですか」と県に質問したら「ここは防災教育しません。できる施設でもないし、やっている団体を紹介する機能になります」と説明されました。東日本大震災で国が示した復興構想7原則で、1番目は教訓伝承、2番目が地域・コミュニティ主体の復興でした。この2原則があってもあのような展示や説明会になってしまったんです。

建物の中にいるのは語り部さんじゃなく、解説員で、基本的にパネル以外のことは話さないルールだったそうです。「私はこんな体験しています」という話をしてもらうところに、解説員の意味があると思うんですけど。シアター映像も、テレビ各局さんが「あの映像を伝えるためなら、うちの映像、全部使っています」みたいに一緒になって、ドリームチームとして映像を作ってほしかった。国や県から頼まれたら、メディアさんも会社の枠を超えた展示がやれたと思うんですよ。関わってない人にとっては「なんか物足りないな」ぐらいの感想かもしれないですけど、明らかにかけるべき手間やお金をかけていないし、宮城県で一つという立ち位置に見合った力をかけていないから、その結果があらわれた施設ですよ。

—新潟県中越地震ではメモリアル施設をどうするか、地元でじっくり議論が交わされました。

僕は「説明を聞く方、答える方」に分かれるのではなくて、行政とも一緒にわいわい言いながら丸くなってやりたいという声があったけど、丸い輪はつくれなかった。宮城県だけで1万人亡くなったことを伝える施設に、みんなの納得感があるものをつくらうという意識やプロセスがなかった。「有識者委員会を何回やった」という事実はあるのですが、足りなかった。被災者のためでも、地域の未来のためでもない施設ができてしまったと報道されています。

ああいう箱でよしとしてしまった我々の罪なんだと思います。我々には、プロセスを踏んで、被災した方、ご遺族の方の声を聞いて何かをつくりあげるといふ地力がなかったし、文化もなかった。だから、我々の愚かさを示す箱なんです、自分も含めてね。気仙沼市にあるリアスアーク美術館の山内宏泰さんが「まともな形で伝承館をつくれるぐらい（成熟していた）なら、東日本大震災であんなに亡くなっていない」と衝撃的な言い方をしました。山内さんからしたら「津波が来る」と分かっていたのに、ちゃんと逃げなさいという教育や文化がなくて、あんなに亡くなった。だから、プロセスも経ず、こんな箱を作ってしまうという、同じ過ちを我々は繰り返してしまっているんじゃないか。

—伝承館では「とにかく逃げて」というメッセージが流されます。

僕は「とにかく逃げて」と言わないようにしています。ご遺族が願ひとして「とにかく逃げてください」と呼びかけるのは分かるんですよ。だけど、展示施設の「とにかく逃げて」の「とにかく」は思考放棄じゃないですか。違うと思うんですよ。地震が起きたら津波が来るかもしれない、だから逃げよう、話し合っておこうと、ちゃんと考えて行動することを身に付けるべきなのに、「とにかく」のモードに何をきっかけに移行するか、実はあいまいなんですよ。

考えて動き続けた人がいます。門脇町一丁目の方は 3.11 の日、いったん高台に逃げたんですけど、「津波が引いたときに下りて、ばあちゃんを迎えに行つた」と言うんですよ。それで背負って、また戻ってきたと言うからびっくりです。これなら行けると思って低い方に動いて 1 人救うようなことは、ルールからしたらあり得ないです。だけど、行動に信念を持って、ばあちゃんの命を救いに行つて僕はすごいなと思つて、状況を見て、自分で考えて判断しているから後悔しないですよ。「なんか分からないけど逃げろ」というのは、次世代に渡すメッセージとしては不十分だと思うんです。

うちのスタッフが言うには、子どもに「勉強なさい」と言つても、勉強しないから。「逃げなさい」と言つて逃げるなら苦勞しないと。この場所には、分かつていても動けなかった人たちがいました。「（津波が）来るかも」と思つても、家族を待ったり、片づけをしたり。僕らは後出しじゃんけんの立場だから「何で動かなかつたの」と言うのは簡単ですけど、家や職場や施設にとどまり続ける人に対して、「逃げなさい」以外のことを、考えないといけないうるんですよ。

それから、「中川はあれ（伝承館）に向かつて文句言つてただけなのか」と言われて、自分でできることを考えたのが、この MEET 門脇なわけですよ。語り部を入れる場所をつくりましようと言つても全然変わらない。遺族が言つても伝わらない、これは無理だと思つて、自分でリスクを背負って寄付もして、法人で借金して建てたんです。普通に考えたら、ここは日本で一番、民間の伝承施設の要らない場所です。市と県がしっかりやる場所じゃないですか。それでもやらないと、今まで語り部さんがやつてこられた 10 年が本当におかしくなっちゃう。民間だからこそできる展示があるんじゃないかと。でも、行政と闘う手法だと、行政とはつながらないし、続かないです。行政さんは、間違えたと言えない組織のようですが、私たちは「自分ができなかつたことがある」と出せる強みがある。

—この場所が 1 つの問題提起なわけですね。

建物自体がね。でも、まだ 1,800 万も借金があつて、19 年ローンだから 100 万円ずつ返し続けなきゃいけないんです。もっと寄付を集めて借金額を減らしたかつたんですけど、コロナもあつて集めきれなかつたんですよ。7,000 万の箱を建てて、1,800 万の借金で済んだらいい方という見方もあるけど。伝承施設運営は民間でやることじゃないです、正直。

MEET の映像には「中川さんだから、もっと強烈なものを作ると思つていた」と言つた人もいるけど、地元の方からは「（思い出すから）二度と見ない」と言われたんですね。外の人には、どぎつい方がいいんでしょうけど、地域の方とやっていくことを考えると、出し方を考えないといけなくて、悩みながらのコンテンツづくりです。大川小も中浜小も、周りに家がないけど、ここは伝承館と、震災遺構の門脇小学校のすぐ横に住まいがあつて、住民の意向に沿わないことはふさわしくない。それはこの難しさであり、魅力でもあります。

—新型コロナウイルスの影響で伝承が危ないと発信されてきました。

延期、キャンセルの繰り返しでした。一方で、語り部さんの話を聞く修学旅行の受け皿にもなつて、京都や沖縄に以前は行つていたマンモス校が東北に来るのをキャッチできたこともありました。MEET の訪問者は、すごく少ないです。箱としての力は弱い。コロナで大人は動かないけど、修学旅行だけは行かせたい動きをキャッチできたときとできなかつたときがある。コロナ前より修学旅行は増えたのには、びっくりで、減つたと思つていたんですよ。一時的な代替地になつただけなら、また元に戻るの、大人たちもちゃんと来てもらえるよう、コンテンツづくりをしなきゃいけない。

修学旅行の相手は、手間がかかります。200 人の団体が来たら一定の収入にはなりますけど、調整も含めて人数がかかるのもうからない。金銭的な持続性はきつい。東京の企業が石巻を訪問したら、1 人 1 往復 2.5 万円、10 人だったら 25 万かかるのを、オンラインで 100 人に聞かせて 5 万円なら安いねという感覚の

ようですが、語り部さんや僕らには大きな額で、高付加価値なわけです。少ない時間でもお金の入りが大きいから、うまく伸ばしたい。コロナによる大きな変化かな。

オンライン、伝承の施設でやっているところは少ないです。語り部の団体はやっていても、行政の施設はほとんどやっていない。箱の意義が、コロナで問われていると思います。オンライン配信したら、何百人に聞いてもらえる、伸びしろがあるのに「私たちの業務は施設を開けることです」と言っていたら、伝承の機会をわざわざ捨てることになります。直接来てもらって感じてもらえることもあるけど、語り部さんのメッセージがオンラインで全国に広がってそれがお金にもなるという可能性、その一歩になればいいです。

—コロナが収まって、現地とオンラインの両方で。

そうそう。修学旅行に来てもらうにしても、事前学習、事後学習にオンラインも使ってもらえば、もっと自由にコミュニケーションができるんじゃないかな。事前準備でも、ここの語り部さんから話を聞く意味はあると思います。

—石巻圏の特徴として、若い語り部がすごく多い。

それに関しては佐藤敏郎先生に1票ですね。教え子が多いし、先生が起こした力はすごいですよ。子ども自身がこうしたいという表現を後押しする、大人がやっていいよと言えば、どの地域でも子どもたちがもっと声を上げてくれたのかなという気はしますけどね。

—過去の災害では、こんなに若い世代で話す人が出たことはなかった。

それは特徴みたいですよ。でも、続いていないですよ。(大川小卒業生の)永沼悠斗君が「1822 問題」と言うように、高校や大学卒業年齢のタイミングでできなくなる。社会人になると圧倒的に難しくなって、続けられる土壌がないんですよ、語り部の仕事って。メディアさんは若者が伝承している記事を書くなら、卒業しても続けられる未来を用意する必要性を書いてほしい。自発的な動きから何かをつくりあげるのは大変です。メモリアルネットワークには、大人や社会の責任として、仕事として伝承活動する人をつくれなかなという思いがあります。ある自治体の学校遺構で解説している人は臨時雇用の職員だけです。給料も上がりにくいし、5年の雇止めもあるから、代わらないといけない。そんな仕事だと若い人が職業にできない。兵庫県は東北に来る学生のお金も出していますよね。丸森で東北大と神戸大の学生と一緒に活動しているのは兵庫県が支えているからです。私たちも、こうした自発的な力をサポートする地域にならないといけない。

—若い世代を後押しする。

僕は語り部さんの役割が重要と思っています。彼ら彼女らが自分の地域をどう話すかが、訪れた人にとってのイメージになります。僕が中越に行ったとき、案内してくれた若い女性が「ヘリで映っているこの写真、私です」と紹介してくれた。Uターンしてきたこの女性に「山古志の何がよくて戻ってきたのか」と聞いたら「全部です」と答えました。地元に戻ってきた若い世代が「山古志の全部が好きなんです」と言う。「人が」とか「気候が」とか幾らでも回答があるのを「全てです」って。こういう語りを聞いた人は、希望を感じますよね？ 伝承している人たちはすごく大事で、東北の宝と思うんです。人から人へ、「守りたい」と伝えてゆく活動ですよ。それを若い人たちが継いでいくことは、未来の命を守る防災につながります。そういう人々を支える取り組みができればと思います。

(以上、4名のテキストとりまとめ：所澤新一郎)

むすびにかえて

シリーズ4回目の今回、新型コロナウイルスの影響が続く中での実施となった。マスク着用や事前検査など参加者がそれぞれ感染予防に留意し、まん延防止期間中は参加者を最小限に絞った。それでも、「感染者が多い東京から来て、長時間会話をしていた」ことが現地において噂を呼ぶ行為であり、眉をひそめる人がいることも知っている。リスクを承知の上で、インタビューを受けていただいたことに感謝したい。

オンライン形式のヒヤリングも検討はした。ただ、志野ほのかさんがあの日のことを伝えてきた野蒜、渥美貴幸さんがホヤを水揚げする谷川浜、武田文子さんが「おのくんファン」を迎え入れてきた「空の駅」、行政の施設と向き合う形で中川政治さんが伝承活動を展開する門脇・南浜、これらの現場で話をうかがう意義に比べたら、採用はできなかった。

キボッチャで会食に興じる地元住民、出港を待つ船の数々、陸前小野駅に到着する電車の音、MEETを訪れる来館者や、その前の公的伝承施設の威容…。直接インタビューとは関係ないが、こうした周囲の素材に囲まれながらお話に耳を傾ける行為は、私にとっては必要不可欠な「エッセンシャル・ワーク」であった。質問内容、やりとりが充実したことは4事例とも間違いがない。対象者との会食、武田さんが出してくださったうどん、本論をしのぐ量のオフレコ発言、現地でしか得られない豊かな時間だった。一般論で私が耳にする「研究者の現場離れ」「現場感ない論文」の傾向が今後、コロナの影響もあって一層強まることが懸念される。客員研究員として、この社研プロジェクトに参加される先輩方の徹底した現場主義を心強く思うし、コロナでも揺らがなかった方針に感謝したい。

今回の対象者4人は、東日本大震災以降、宮城県石巻市や東松島市でそれぞれの活動に奔走してきた。語り部、ホヤの購入・消費、おのくんの購入や里親との交流、伝承活動。いずれも石巻市外、宮城県外の人たちとの交流が多い点が共通している。外部者との関わりなしにありえない活動である。震災から10年が経過し、この間の豊かな交流や学び合いが語られた。石巻の人になった中川さん含め、4人が外部者をどう見ていたのか、あるいは4人の活動を外部者はどう受け止めていたのか、も伝わってくる。外部との交流が盛んだったということはコロナ禍でそれだけ大きな影響を受けたということであり、訪問客や売り上げの減少、オンラインとの両立などに直面しながら模索を続けてきた。

4人には深い敬意を抱いてきた。過去に本業の記事等で紹介させていただいたこともあるが、もっと語ってもらう機会を探していた。何がその活動を持続させ、多くの人を巻き込むまでに発展していったのか。東日本大震災以降に始まった社会・外部者との関わりの中で歩んできたそれぞれの思いや原点を、その豊かな言葉群を残したかった。インタビューはいずれも数時間に

及び、テープ起こし段階の A4 で 60～80 枚程度の分量を 10 枚程度に圧縮するのは大変な困難ではあったが、やり甲斐のある作業でもあった。

志野ほのかさん

志野さんの語りを 2020 年、オンラインで聞く機会があった。津波でんでんこの核心のような話をさらに聞きたくなった。ただご本人は大学卒業を控え、東日本大震災 10 年で取材が再び殺到することも想像できたので、社会人になってからのタイミングで良かったと思う。インタビュー後、志野さんが「今日は話し尽くした充実感があります」と言ってくださった。通常は時間の制約もあり、教訓を伝えることが中心になってしまうようだ。聞く側の事情に語りを合わせてくださっていること、留意したい点である。私たちは、ふだんは強面でも知り合いには孫を自慢し、あの日は孫の帰宅を待ち続けていた五男さんの思い出にも関心があった。野蒜を訪れた外部者が「何もないところだね」と言うことへの悔しさも語られた。志野さんが野蒜をますます好きになったという話について、あとがきで言及しようと思っていたところ、偶然、筆者が 5 歳の時に野蒜海岸を親と訪れた写真が実家で見つかった。広く白い砂浜、穏やかな波。幾度となく志野さんが通った美しい海がそこにはあった。今の職場でも語る機会があったとのこと、またお話を聞いてみたい。

渥美貴幸さん

東日本大震災の前、仙台などでホヤを口にする機会があったが「いいんじゃない」という程度で、三陸のサンマやサバ、カキなどに比べると優先順位は高い方ではなかった。それほど新鮮ではなかったのかもしれない。ところが震災後、女川で水揚げしたばかりのホヤをいただいて、おいしさにのけぞりそうになった。印象が変わりつつあったころ、ほやほや学会のお膳立てにより、東京・恵比寿のフレンチ料理店でホヤ尽くしのメニューを試食し、完全にノックアウトされた。その場にいた渥美さんがまた魅力的だった。ホヤの魅力を伝えるためだけにわざわざ上京する漁業者も珍しい。ほやほや学会などからホヤの魅力を伝える刊行物は震災後に出ているが、渥美さんによるホヤ論を活字で残したいとずっと思ってきた。多くのホヤファンに、こんなにこだわりを抱いている漁師の存在を知ってほしかった。それと合わせて、初心者として漁師を始めて重ねてきた工夫、販路の開拓、被災しても踏みとどまった意地、廃棄せずに踏ん張った思い。お子様にもいつか、お父様のこの記録を読んでほしいという願いを勝手に込めてインタビューをまとめた。

武田文子さん

武田さんたちが「おのくん」づくりを始めた 2012 年春の約半年後、筆者は中間支援団体スタッフに連れられて小野駅前仮設住宅を訪れた。集会所を埋め尽くす「おのくん」群に圧倒された。ミシンを使い、縫い物をする女性たちが扱うカラフルな靴下の数々は、当時「灰色」の印象が強

かった被災地で強烈なインパクトがあった。大手メディア等の報道ではこの不思議なキャラクターを見聞したことがなく「伝えたい」と思った。その場で武田さんに取材をお願いし、記事は河北新報にも掲載してもらった。テレビ局が後追い取材に訪れ、東日本大震災で数少ない私の「先行記事」だった。いつも私たちに明るく振る舞ってくださる武田さんの被災体験も活字に残させていただくことにした。一緒に活動してきた新城隼さんは「馬車馬のように走り回ることによって自分を保っていたのではないかと。そうでなければメンタルは厳しかったかもしれない」と察している。ほかの作り手さんも被災している。現地を訪れたことがなく、生まれた背景を知らない里親さんに「マイおのくん」に対する新たな見方が加わるかもしれない。食堂が始まる日を心待ちにしている。

中川政治さん

4人の中で唯一、外から石巻に入った中川さんだが、いまや東北の伝承活動になくてはならない存在になった。施設の在り方や運営について行政側には耳の痛い言葉も並んだが、じっくり読み込んでほしい。直後から俯瞰的な目で石巻を見ている彼だからこそ語れる内容だと思う。彼にはがれき詐欺事件のゴタゴタを巡って嫌気がさし、石巻を離れる選択肢もあったはずである。多くのリーダー的支援者が中川さんの立場に置かれたら「やっていたら」と放り出し、石巻を去ったのではないだろうか。石巻を支えたボランティアに対する責任としてとどまり、無給状態で報告書を出した、その思いは誰かが残さなければならないと考えてきた。そんな中川さんだから MEET 門脇を立ち上げると聞いたときも違和感はなかった。被災の当事者ではないけれども、これだけ伝承のことを考え、借金までして奮闘している本気な人の声を生かせるのか、地域の力が問われているとも思う。もともと事務能力が優れ、アイデアが豊富で、素晴らしい感性の人だと思っていたが、近年は各地の人や団体をつないでいく行動力を驚嘆する思いで見ている。

(以上、所澤新一郎)

参考文献

- ◇チャイルドラインみやぎ, 2014, 『子どもとともに—東日本大震災被災地子ども支援NPO三年の歩みと未来の提言—』
- ◇飛田恵美子, 2019, 『復興から自立への「ものづくり」』小学館
- ◇河北新報社報道部, 2019, 『止まった刻—検証・大川小事故—』岩波書店
- ◇雁部那由多・津田穂乃果・相澤朱音, 2016, 『16歳の語り部』ポプラ社
- ◇岸澄夫, 2013, 『3・11 石巻・小学校校長奮戦記』不昧堂出版
- ◇黒田由彦, 2021, 「5つの復興評価の視点: 要素の間の相乗的關係—アダプティブ・ガバナンス」(2021年度日本社会学会大会 2021.11.13@東京立大学・一般研究報告 I)
- ◇小林秀行, 2020a, 「『復興とは何かを考える連続ワークショップ』の展開と到達点—「復興」とはいかなるものなのか—」『日本災害復興学会論文集』第 15号

- ◇小林秀行, 2020b, 「「災害復興」の含意をめぐる一考察」『日本災害復興学会論文集』第15号
- ◇みらいサポート石巻, 2013, 『石巻災害復興支援協議会活動報告書』
- ◇みらいサポート石巻, 2016, 『石巻におけるNPOの貢献』
- ◇奥松島物語プロジェクト, 2013, 『奥松島物語 創刊号』荒蝦夷
- ◇大森直樹, 2011, 『大震災でわかった学校の大問題』小学館新書
- ◇大西暢夫, 2012, 『3・11の証言—心に留める東日本大震災 震災報告Ⅱ—』
- ◇大矢根淳, 2021, 「レジリエンスの基底と社会的諸主体の集会的選択過程」(2021年度日本社会学会大会 2021.11.13@東京都立大学・一般研究報告Ⅰ)
- ◇大矢根淳, 2021, 「東日本大震災・現地調査の軌跡X—生活再建・コミュニティ再興の災害社会学の研究実践に向けて(覚書)—」『専修大学人間科学論集』Vol.11, No.2
- ◇3・11 みらいサポート, 2021, 『2020年東日本大震災伝承調査報告書』
- ◇所澤新一郎・佐藤慶一・大矢根淳, 2018, 「復興ステークホルダーの探索的再構築に関する研究実践—被災地・石巻での聞き取り調査から—」『専修大学社会科学研究所月報』No.660
- ◇所澤新一郎・大矢根淳, 2019, 「減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相(Ⅰ)—被災地石巻での聞き取り調査から:「仮設住宅」生活を射程に—」『専修大学社会科学研究所月報』No.672
- ◇所澤新一郎・大矢根淳, 2020, 「減災サイクルのステークホルダーと事前復興への取り組みの実相(Ⅱ)—被災地石巻での聞き取り調査から:(脱)仮設・「復興」から日常への収斂—」『専修大学社会科学研究所月報』No.684
- ◇高橋和雄編著, 2014, 『災害伝承—命を守る地域の知恵—』古今書院
- ◇寺島英弥, 2022, 『東日本大震災遺族たちの終わらぬ旅』荒蝦夷
- ◇頓所直人, 2012, 『笑う、避難所—石巻・明友館136人の記録—』集英社新書
- ◇『毎日新聞』2016年2月10日、2月12日、3月1日
- ◇『総合教育技術:震災と学校現場(4月号増刊)』小学館, 2012
- ◇「つなみ 被災地のこども80人の作文集」『文芸春秋(8月臨時増刊号)』, 2011

執筆者紹介

所澤新一郎 しよざわしんいちろう 本研究所客員研究員・共同通信社編集局気象・災害取材チーム長
大矢根 淳 おおやね じゅん 本学人間科学部教授、本研究所所長

〈編集後記〉

No. 708 は、所澤新一郎客員研究員と大矢根淳所員による貴重な成果（の一部）を掲載する。本稿は、東日本大震災の被災地である石巻市に執筆者（たち）自身が赴き実施した、その復興を推し進めてきた当事者を対象とする聞き取り調査の記録をまとめたものである。本稿を含む一連の研究の中心的な課題は、被災地での生活再建・復興がどのように進捗しているのか、当事者たちの証言を通じて浮き彫りにすることにある。本稿は、2017 年の研究グループの発足から、若干の構成メンバーの変化はあったものの、2022 年の現在に至るまで幾重にも積み重ねられてきた成果の一部であり、その第 4 部にあたる。東日本大震災の「復興」事象に焦点をあて、聞き取り調査を通じてローカルで地道に続けられている復興への取り組み・現実の過程を発掘・表象してきたこの壮大な作業・研究は、そこでしか触れることの出来ない数多くの聞き取り調査を柱としているというだけでも、まずは貴重というほかない。

本稿に掲載される 2021 年度のインタビューは、過年度の 2017-19 年度に行われたものから丸一年以上を挟んで実施されたものである。このブランクの要因は言うまでもなくコロナ禍であり、それゆえにコロナ禍との対峙、それへの対応を含む、当事者にしか知りえない最近の活動事情が明らかとなる内容となっている。本稿では、精力的な活動のあり方とそれを推し進める当事者たちの姿や思いがいきいきと描かれると同時に、現在も多くの課題が残されている現実が浮き彫りになる。

圧倒的な現実を伝える重厚かつ貴重な成果に対し、余計な雑文は不要と思われる。何より手にとって読んでいただきたい。すでに本月報のバックナンバーに収められているコロナ禍前のインタビューと比較することも興味深いと考える。 (M)

2022 年 6 月 20 日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田 2 丁目 1 番 1 号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 大矢根 淳

製作 株式会社グラフィカ・ウエマツ

新宿区下落合 4-21-19 目白 LK ビル 3F 電話 (03)6915-3835
